

平成17年度

市原市内遺跡発掘調査報告

稲 荷 台 遺 跡 K 地 点
海 士 遺 跡 群 十 二 天 地 区
辰 巳 台 遺 跡 群 辰 巳 ヲ 原 地 区
姉 崎 二 子 塚 古 墳
棗 塚 遺 跡

2 0 0 6

市 原 市 教 育 委 員 会

平成17年度

市原市内遺跡発掘調査報告

い なり だい
稲 荷 台 遺 跡 K 地 点
あ ま
海 士 遺 跡 群 十 二 天 地 区
たつ み だい
辰 巳 台 遺 跡 群 辰 巳 ヶ 原 地 区
あね さき ふた ご づか
姉 崎 二 子 塚 古 墳
なつめ づか
棗 塚 遺 跡

2 0 0 6

市 原 市 教 育 委 員 会

序 文

千葉県市原市には、東京湾の豊かな漁場、村田川・養老川がもたらした肥沃な平野、そして緑豊かな森林という恵まれた環境があり、数千年の昔からたくさんの人々が生活してきました。おびただしい数の遺跡やすばらしい出土品の数々が、そのことを雄弁に物語っています。

先人達の残した文化遺産である遺跡は、本来豊かな自然とともに、後世に伝え残すことが最善の選択です。しかし、活力ある地域の経済・文化を創造していくためには、社会資本の整備もまた着々と整えていかなければなりません。開発と文化財保護の調和をはかり、また、文化財を街づくりや教育等にいかに活用していくかは、私たちに課せられた大きな責務といえます。

本事業は、開発によって失われていく市内所在遺跡について、国庫および県費の補助を受けて発掘調査を行い、記録としてまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に心より御礼申し上げます。

平成18年 3 月

市 原 市 教 育 委 員 会
教育長 山 中 齊

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した、市原市内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、市原市教育委員会の委託により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行は市原市教育委員会が行った。
- 3 本報告書所収の調査は以下のとおりであり、所在地、調査原因等は巻末の報告書抄録に記載した。
 - (1) 稲荷台遺跡K地点（調査コード セ397） 対象面積499.6m²、確認調査49m²
調査期間 平成17年5月9日～平成17年5月13日 担当 櫻井敦史
 - (2) 海土遺跡群十二天地区（調査コード セ399） 対象面積315.51m²、確認調査31.5m²
調査期間 平成17年6月1日～平成17年6月7日 担当 小橋健司
 - (3) 辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区（調査コード セ400） 対象面積796m²、確認調査79.6m²
調査期間 平成17年7月4日～平成17年7月8日 担当 近藤 敏
 - (4) 姉崎二子塚古墳（調査コード セ403） 対象面積500.12m²、確認調査50m²
調査期間 平成17年10月24日～平成17年10月31日 担当 忍澤成視
 - (5) 棗塚遺跡（調査コード セ404） 対象面積201.14m²、確認調査20.1m²、本調査82m²
調査期間 平成17年12月5日～平成17年12月16日 担当 木對和紀
- 4 本書の整理・執筆は櫻井・小橋・忍澤が調査担当遺跡について、他は西野雅人が行った。なお、動物遺体について鶴岡英一、中世遺物について千葉市立加曽利貝塚博物館・築瀬裕一氏の協力を得た。
- 5 本書で示す北は、原則として日本測地系（関東第Ⅸ系）に基づくが、磁北の場合その旨を示した。

本文目次

1 調査遺跡の位置と概要	1	4 辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区	14
2 稲荷台遺跡K地点	4	5 姉崎二子塚古墳	21
3 海土遺跡群十二天地区	10	6 棗塚遺跡	23

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	2	第14図 辰巳台遺跡群遺物図(1)	18
第2図 稲荷台遺跡K地点周辺地形図	6	第15図 辰巳台遺跡群遺物図(2)	19
第3図 稲荷台遺跡K地点遺構配置図	6	第16図 姉崎二子塚古墳と調査区位置図	22
第4図 稲荷台遺跡K地点遺構図(1)	7	第17図 姉崎二子塚古墳遺構図	22
第5図 稲荷台遺跡K地点遺構図(2)	8	第18図 姉崎二子塚古墳遺物図	23
第6図 稲荷台遺跡K地点遺物図	9	第19図 棗塚遺跡調査区位置図	24
第7図 海土遺跡群十二天地区位置図	10	第20図 棗塚遺跡遺構・遺物図	25
第8図 海土遺跡群十二天地区遺構図(1)	11	表目次	
第9図 海土遺跡群十二天地区遺構図(2)	12	第1表 稲荷台遺跡K地点遺構一覧	5
第10図 海土遺跡群十二天地区遺物図	13	第2表 稲荷台遺跡K地点遺物観察表	5
第11図 辰巳台遺跡群位置図	15	第3表 辰巳台遺跡群貝サンプル	20
第12図 辰巳台遺跡群調査区全体図	16	第4表 棗塚遺跡出土遺物	23
第13図 辰巳台遺跡群遺構図	17	報告書抄録	巻末

1 調査遺跡の位置と概要

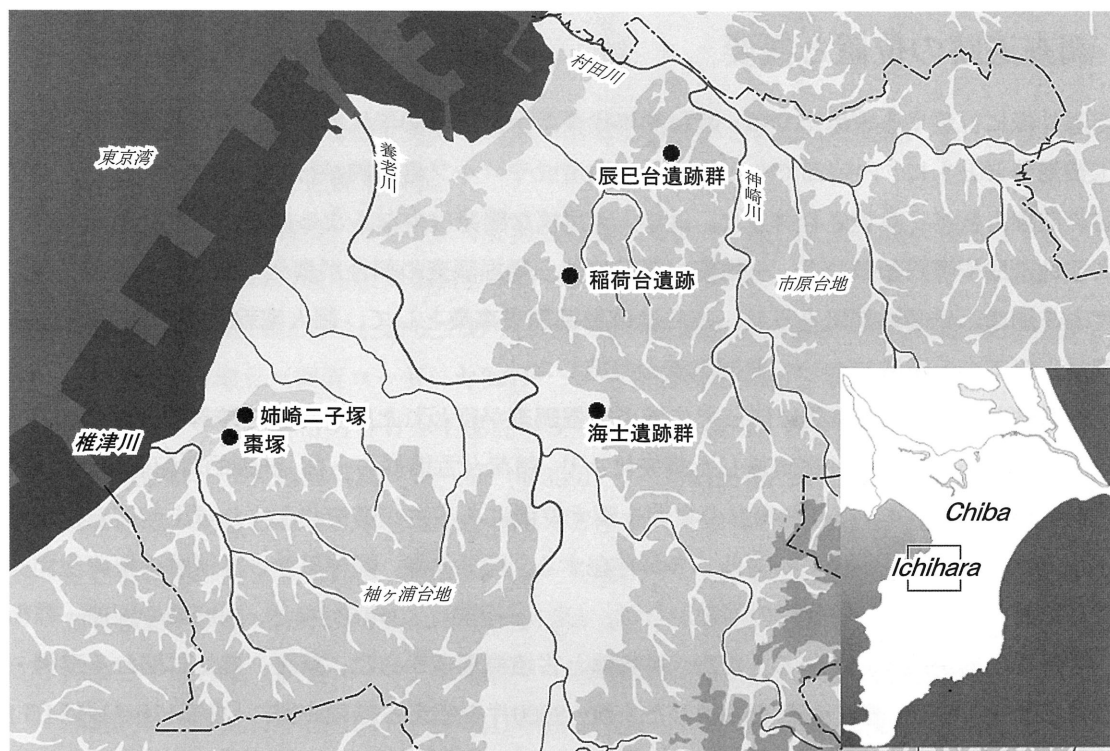
首都圏外縁に位置する市原市では、昭和30年代後半から昭和40年代前半の高度成長期以降、海岸部の京葉工業地帯とともに、内陸部でも大規模な宅地造成やゴルフ場建設が行われるようになり、工事に伴う遺跡の発掘も数多く実施されてきた。近年、大規模な開発は少なくなったが、都市計画区域内における個人宅地造成や道路整備など、小規模な開発に伴う発掘調査の割合が増えている。市原市では、昭和62年度より国庫、県費の補助を受け、市内遺跡発掘調査事業として、個人宅地造成等に対応している。本年度は、以下の5遺跡について発掘調査を実施した。

稲荷台遺跡は、区画整理事業に伴って広域で発掘調査が行われた国分寺台遺跡群の東端にあたる。昭和51年～55年にかけて断続的に実施した調査により、稲荷台古墳群の一部、計画的に配置された建物群、古代道などが見つかっている。建物群の東側を画す位置にある古代道を北上すれば上総国府推定地と市原郡家推定地が存在し、西側には国分二寺が存在する。国分僧寺、国分尼寺と当遺跡の祭祀空間は直線状に並ぶ位置関係にある。建物群の周辺からは、「京」・「国厨」・「市厨」など、国府域や国衙・郡衙の施設を示す墨書土器が出土している。また、建物群と古墳群周辺からは、祭祀・儀礼に関わる遺構・遺物が多数見つかっている。獣の頭部を埋納した土坑、2000片を超える緑釉陶器、「貞観17年11月24日」銘・「道士」等の墨書土器など、宗教遺跡としても注目すべき資料が多い(浅利他2003)。なお、最古の有銘鉄剣として著名な「王賜」銘鉄剣も当遺跡内の稲荷台1号墳から出土したものである。今回の調査区は、台地の括れ部と古代道を挟んだ東側対岸の郡本大宮遺跡(浅利1999)と同一台地上といえ、同遺跡の古墳後期～平安時代の大規模な集落の一面を調査したことになる。

海士遺跡群は、養老川下流～中流域右岸の低位段丘面上に所在する。周辺の標高は19m前後であり、遺構確認面は立川ローム層最上面のいわゆるソフトロームである。調査以前は畑地として利用されており、土器片の散布が目立っていた。遺跡群は、きわめて広い範囲を括っており、その一部は有木(蟻木)城跡として、また南西側の段丘縁辺部は古墳群として重複登録されている。昭和54年には、水道管埋設に伴って、東南140mの地点(第7図●)で34m²の発掘調査が行われている。その結果、ほぼ南北方向に近接して走る2条の溝と、それに並行する土坑3基が検出されており、城郭の関連遺構である可能性が考えられている(田中他1989)。なお、このときは遺跡名称として「海士有木遺跡」を使用しているが、今回は分布地図の名称を採用し、字名をとって十二天地区とした。

辰巳台遺跡群は、村田川下流から入り込む2つの谷、菊間川谷と坂崎川谷に挟まれた台地上に位置する。遺跡の範囲は広大で、辰巳台地区の宅地開発から取り残された部分を大きく括っており、大字大厩から辰巳台の住宅地にまたがる。これまでに、「大厩細野遺跡」(昭和63年調査・田中1994、弥生時代後期住居跡1)、「菊間向原遺跡」(昭和62年調査・市原市文化財センター1988、縄文早期炉穴2、縄文中期前葉住居跡1、終末期方墳1)、辰巳ヶ原遺跡(昭和56年調査・田中1989、縄文早期炉穴3群16基・貝層入り土坑1、古墳後期住居跡3。昭和57年調査・武部1983、縄文早期炉穴4、古墳後期の住居跡1)の発掘、大厩二子塚古墳他(永沼他1995、全長70mの前方後円墳、4世紀後半)の測量などの調査歴がある。また、未調査であるが早期後葉に形成されたと推定される地点貝塚「大厩細野貝塚」が存在する。これらの調査によって、縄文早期後葉、弥生後期～古墳初期、古墳後期に集落が形成されたことが明らかになった。また、4世紀後半から大厩古墳群に属する古墳が造られている。調査区周辺は荒地・畑地で、対象

調査遺跡の位置と概要



a 地形区分図 (1 : 150,000)



b 地形図 (1 : 100,000)

第1図 調査遺跡位置図

範囲や周囲には条痕文土器と弥生～古墳時代の土器が比較的濃密に散布している。

県指定史跡**姉崎二子塚古墳**は、9基の大型古墳と中小の古墳からなる姉崎古墳群に属する墳丘推定長110m、後円部高9.5mを有する前方後円墳である。築造年代は5世紀中葉と推定される。古墳は、姉崎海岸の旧海岸線から800mほど入った標高5mほどの砂丘帯上に存在する。姉崎付近の海岸平野には数条の砂帯列が形成されているが、古墳は海岸側から2列目の砂帯の南西端を切り取り、さらに盛土をして

造られている。古墳の東および南側は良好に保存されているが、西側及び北側では住宅が迫り一部墳丘が削平されている。昭和22年、國學院大學による墳丘主体部を中心とした調査では、直弧文付石枕、甲冑、直刀、銀製耳飾り、円筒埴輪などが出土し(大場・亀井1951)、後に石枕は国の重要文化財に指定されている。墳形・規模は昭和56年の地形測量によって明らかになり、平成5年にも追加測量が行われ測量図が修正されている(千葉県教育委員会1994)。周溝については不明な点が多いが、後円部北東側水田の扇形の区画や北西側の畦道の位置・形状などから、盾形周溝を想定することができ、これをもとに周溝を含めた主軸長160mに及ぶ古墳全体の形状が復元されている(白井2003)。なお、周辺の砂帯列上には妙経寺古墳、棗塚古墳等が存在したことがわかっていたが、最近の調査によって、多数の中小円墳が稠密に存在することが確認されている(小出2001、櫻井2003、近藤2005)。海岸に小山が並ぶ往時の風景は、海上交通の重要なランドマークとなっていたことであろう。

棗塚遺跡は、二子塚古墳より陸側の砂帯列上を広域に括った遺跡群である。市内平野部において八幡御墓堂遺跡と並ぶ代表的な中世遺跡といえる。砂帯上の標高は5～6mで低湿な環境から、動植物遺体やその加工品が良好に保存されている。平成9年に都市計画道路建設に伴って2次にわたる調査を行い、中世遺構群を検出している。人骨を伴う土葬墓21基、火葬墓1基、粘土入り土坑5基、幅8mの側溝を伴う道路跡、貝層、鍛冶跡などが主なものである。出土遺物の時期は14世紀後半から16世紀初頭にわたり、室町時代後半にあたる15世紀第2～第3四半期を主体としている。今回の調査区に隣接した部分では粘土入り土坑が重複して発見されている。整理作業は未了であるが、22体の人骨の分析鑑定を実施しており、形質的特徴が中世人骨の平均的な様相と一致すること、半数以上が未成人であり、幼児が多いこと、1体に梅毒性の骨病変が認められることなどが判明した(松村他2006)。今後多量の土器類、スラグや貝層の分析によって生活や生業の内容が明らかになるものと期待される。

文献

- 浅利幸一 1991 『市原市郡本大宮遺跡』市原市文化財センター調査報告書 第41集
浅利幸一他 2003 『市原市稻荷台遺跡』市原市文化財センター調査報告書 第83集
市原市文化財センター 1988 「菊間向原遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』
田中清美 1994 「大庭細野遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
大場磐雄・亀井正道 1951 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」考古学雑誌37-3
小出伸夫 2001 「姉崎妙経寺遺跡(4次調査)」『市原市文化財センター年報 平成10年度』
近藤敏 2005 「姉崎山新遺跡(第3地点)」『市原市文化財センター年報 平成15・16年度』
櫻井敦史 2003 「姉崎妙経寺遺跡」『市原市文化財センター年報 平成12年度』
白井久美子 2003 「205 姉崎古墳群」『千葉県の歴史 資料編考古2(弥生・古墳時代)』千葉県
田中清美他 1989 『市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡・姉崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡 一不特定遺跡発掘調査報告(1)ー』市原市文化財センター調査報告書第32集
武部善充 1983 『辰巳ヶ原遺跡』山武考古学研究所
千葉県教育委員会 1994 『千葉県重要古墳群測量調査報告書一市原市姉崎古墳群一』
松村博文・中村恵美・鈴木隆雄・三谷圭 2006 「姉崎棗塚遺跡出土の中世人骨について」『市原市文化財センター研究紀要VI』

2 稲荷台遺跡K地点

今回の調査対象地は、国衙関連の建物群、祭祀遺構・遺物の集中する稲荷台遺跡E地区(浅利他2003)と、古墳時代後期から平安期にわたる集落、郡本大宮遺跡(浅利1999)の中間地点にあたる。調査の結果、円墳と思われる溝状遺構1基、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、奈良・平安期の竪穴住居跡2軒を確認した。よって古墳時代中期に稲荷台古墳群の一角として成立した可能性が高く、後期以降は集落域に転化した。7世紀代の遺構は無いが、狭い調査範囲内でのことであり、付近一帯としては大宮遺跡と同様の継続集落遺跡と思われる。8世紀後葉と思われる竪穴住居跡2軒は、稲荷台遺跡E地点で最古にあたるA期竪穴住居群と同時期だが¹⁾、その後のE地区が掘立柱建物を中心とする特殊空間へと発展したのに対し、今回調査したK地点では9世紀以降の遺構は確認されなかった。また、国衙との関わりを直接示するような遺構・遺物は確認されず、通常の集落域以外の評価は現時点でできないことを明記しておく。

以下に各遺構の説明を記述するが、周辺地形図以外の平面図はすべて磁北表示である。

1号墳 確実に伴う遺物は皆無であり詳細は不明と言わざるを得ないが、プランが円形に見え、稲荷台古墳群に近いことから、その一環たる小規模円墳の可能性が高い。覆土の色調はやや褐色味があり、3・4号住居跡に類似する。覆土中から9世紀末の土師器皿が出土しているので、少なくとも周溝が完全埋没したのは平安期以降であり、周囲の裸地化が進行していたのであろう。

1号竪穴住居跡 5トレンチと6トレンチ内サブトレンチにおいて掘形まで検出した。床面は竪穴中央付近でハードロームが露出するが、周囲には黒色土を床下に充填している。北壁際で確認された周溝は、東壁まで廻らない。竪穴東壁付近の床面直上から鬼高式期の坏が出土しており、6世紀前葉の遺構と推定した。覆土は褐色土を均一に含むが、埋め戻しの痕跡は認められず、裸地化した環境における自然埋没と思われる。

2号竪穴住居跡 覆土は全体にローム粒含有度が高くやや褐色味が強いが、自然埋没と思われる。貼り床は確認できず、掘形がそのまま床として硬化する。竪穴中央部は良く硬化し(9トレンチ内クランク部を横断する点線を境に北側)、3基の円形ピットを検出したが、そのまま埋め戻した。硬化面際の9トレンチ内クランク部に方形のピットを伴うが、向きが竪穴に合わないため、貯蔵穴か否かは判断できない。このピット覆土上(床レベル)から鬼高式期の坏が出土しており、6世紀後葉から末葉の遺構と推定した。

1号竪穴住居跡と列を成しているが、1号竪穴は廃絶後しばらく開口していたものと思われ、2号竪穴との規模差もあるので、これを連続した建て替えとは捉えがたい。

3号竪穴住居跡 竪穴規模は2号竪穴とほぼ同列であるが、プランはやや不整形と思われる。掘形は竪穴中央を残し掘り窪め、ローム主体土を充填し貼り床する。西壁中央に浅黄色の粘土質土でカマドを構築する。遺物はほとんどないが、10トレンチ内サブトレンチから出土した須恵器鉢から8世紀後葉の遺構と推定する。建物廃絶直後、竪穴北半分を軽く埋め(土層断面図m・n層)、焚き火をした後に竪穴を完全に埋め戻している。廃絶祭祀を示すものか、あるいは単に廃絶後の片づけ・整地痕跡なのかもしれない。

4号竪穴住居跡 6トレンチ北西隅と北側のサブトレンチでプランのみ確認した。覆土の色調は3号竪穴に似るが、埋没過程は不明である。主軸方向も3号竪穴に近いので、奈良・平安期の遺構と推定し

稲荷台遺跡K地点

た。今回の検出面で遺物は発見されなかった。

文献・註

浅利幸一 1991 『市原市郡本大宮遺跡』 市原市文化財センター調査報告書 第41集

浅利幸一他 2003 『市原市稲荷台遺跡』 市原市文化財センター調査報告書 第83集

(1) 浅利他2003、第3章第2節

(2) 浅利1991、第3図を引用、一部加筆

第1表 稲荷台遺跡K地点遺構一覧

遺構No.	トレンチ	主軸(m)	上場面積(m ²)	下場面積	深度(m)	主軸方向	時期	古い	新しい	旧No.
1号墳	2トレンチ				0.49					1住
1号竪穴住居跡	5・6トレンチ	6.82×(6.65)	(44.8)	(38.7)	0.25	N-51.5° -W	6c前葉		2・3竪	2住
2号竪穴住居跡	5・9トレンチ	4.29×(4.37)	(18.6)	—	0.23	N-32.0° -W	6c後葉～末	1竪	3竪	3住
3号竪穴住居跡	8～10トレンチ	4.25×4.56	(17.8)	(16.7)	0.29	N-63.8° -W	8c前葉	1・2竪		4住
4号竪穴住居跡	6トレンチ	(3.07)×3.07	(9.5)	—	—	N-75.0° -W	奈良・平安期か			5住

第2表 稲荷台遺跡K地点遺物観察表

土器					器面/断面 () は復元値 単位: cm海: 海綿骨針											
遺 構	No.	種別	器種	状 況	注記	外面特徴	内面特徴	遺存度	焼成	色調	口径	最大径	底径	器高	胎 土	時期
1号墳	1	土師器	皿	覆土一括	2t-2	底部のみ手持ちヘラ削り調整	横ナデ	1/4以下	良	10YR6/4にぶい黄橙	(13.6)	(14.0)	(7.2)	2.2	白色微粒・金雲母小粒・海少	9c第4
1号竪穴	1	土師器	坏	東壁際ほぼ床直上	6t-4	丸底の底部を手持ちヘラ削り後、口縁部を横方向ナデ 口縁にのみ赤彩(7.5YR6/6橙)遺存	ヘラナデ後、ヘラミガキ全面赤彩	ほぼ完形	良	10YR6/4にぶい黄橙	13.7	13.9	—	3.6	白色微粒・金雲母微粒・海	6c前葉
2号竪穴	1	土師器	坏	床面レベル	3住-25	丸底の底部を手持ちヘラ削り後、全面ヘラミガキ	全面ヘラミガキ	3/4以上	良	7.5YR3/1黒褐/7.5YR6/6橙	13.0	14.2	—	3.2	褐鉄鉱小粒・金雲母小粒少	6c 後葉～末
2号竪穴	2	土師器	甕	床面からやや上、4層中	3住-5	胴部、下方向ヘラ削り後、頸部ナデ締めし、口唇部やや玉縁状になる	左方向ヘラナデ	1/4以下	良	10YR6/4にぶい黄橙	(18.6)	(19.1)	—	—	石英小粒・金雲母微粒	
2号竪穴	3	土師器	甕	床面からやや上、4層中	3住-19	胴部、縦方向ヘラ削り後、下位を斜方向ヘラ削り、底部も横方向ヘラ削り	斜方向ヘラナデ	1/4	良	2.5YR5/8明赤褐	(23.3)	(23.9)	6.7	23.2	石英微粒多、白色微粒・褐鉄鉱中粒、角閃石微量	
2号竪穴	4	土師器	甕	床面からやや上、4層中	3住-8	胴部上位を左方向にヘラ削り後、中位以下を下方向にヘラ削り、下位部ナデ締め	左方向ヘラナデ	1/4以下	良	10YR4/3にぶい黄褐	(16.1)	(19.0)	—	—	石英小粒、海少	
3号竪穴	1	須恵器	鉢	9トレンチ内サブトレイ一括	9t-26	横ナデ後、体部中位以下を回転ヘラ削り調整	棒状工具で横ナデ	1/4以下	良	5PB6/1 青 灰/2.5Y7/2灰黄	(6.8)	(8.5)	—	—	焼き締まる 表面被熱発泡、二次被熱か 白色小粒少	8c後葉

土製品

単位:cm ():現状値

単位:g

遺構	No.	種別	状況	注記	特徴	遺存度	最大長	最大幅	厚さ	焼成	色調	胎土	重量
1号竪穴	2	支脚	覆土一括	2	側面を丁寧にナデ調整	破片	(5.8)	(4.9)	(4.1)	良	7.5YR6/6橙	白色小粒・褐鉄鉱小粒	86.9
1トレンチ	1	不明	一括	1t-1	粘土板の表・側面を鋭角にヘラナデ、表にヘラで筋目入れる 裏は木板でナデ	破片	(7.2)	(3.6)	1.2	良	7.5YR6/6橙	金雲母小粒多、長石小粒・褐鉄鉱小粒	30.0

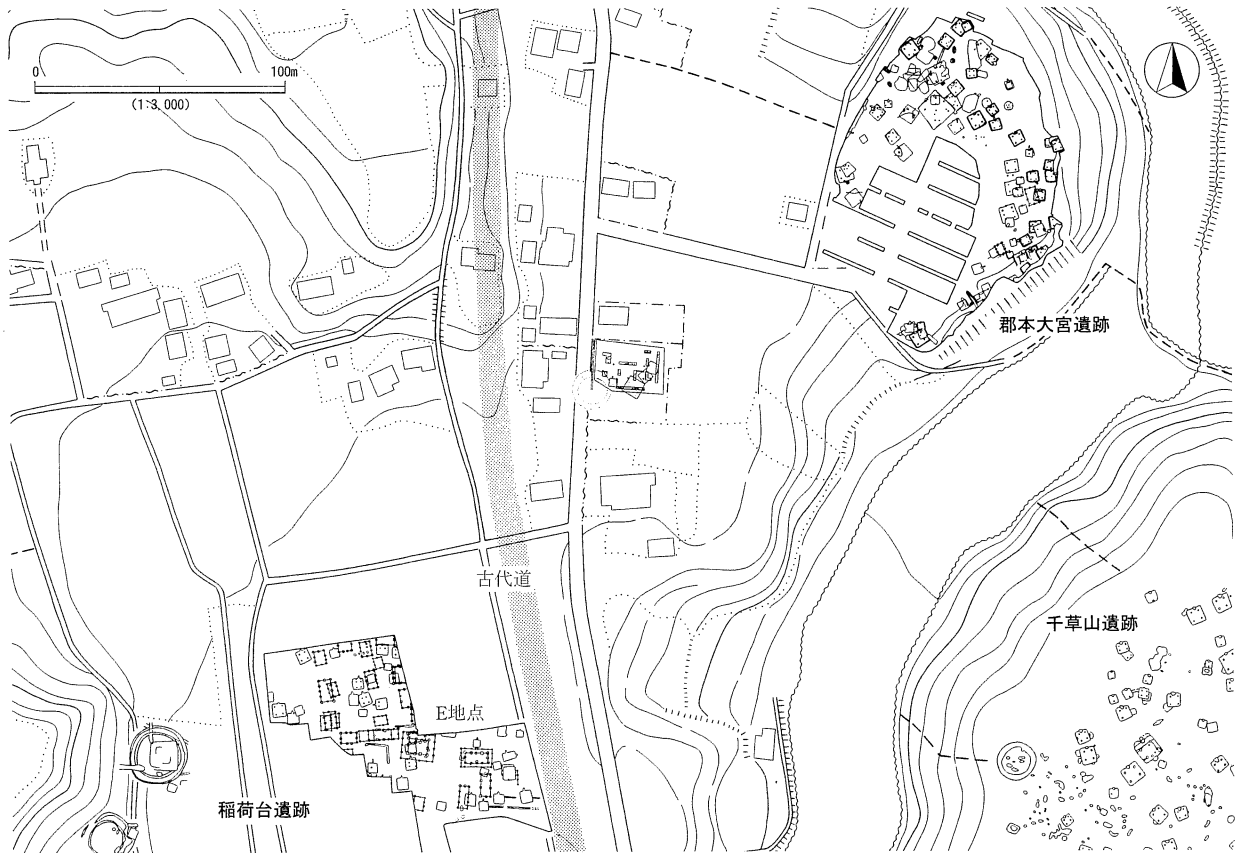
金属製品

単位:cm ():現状値

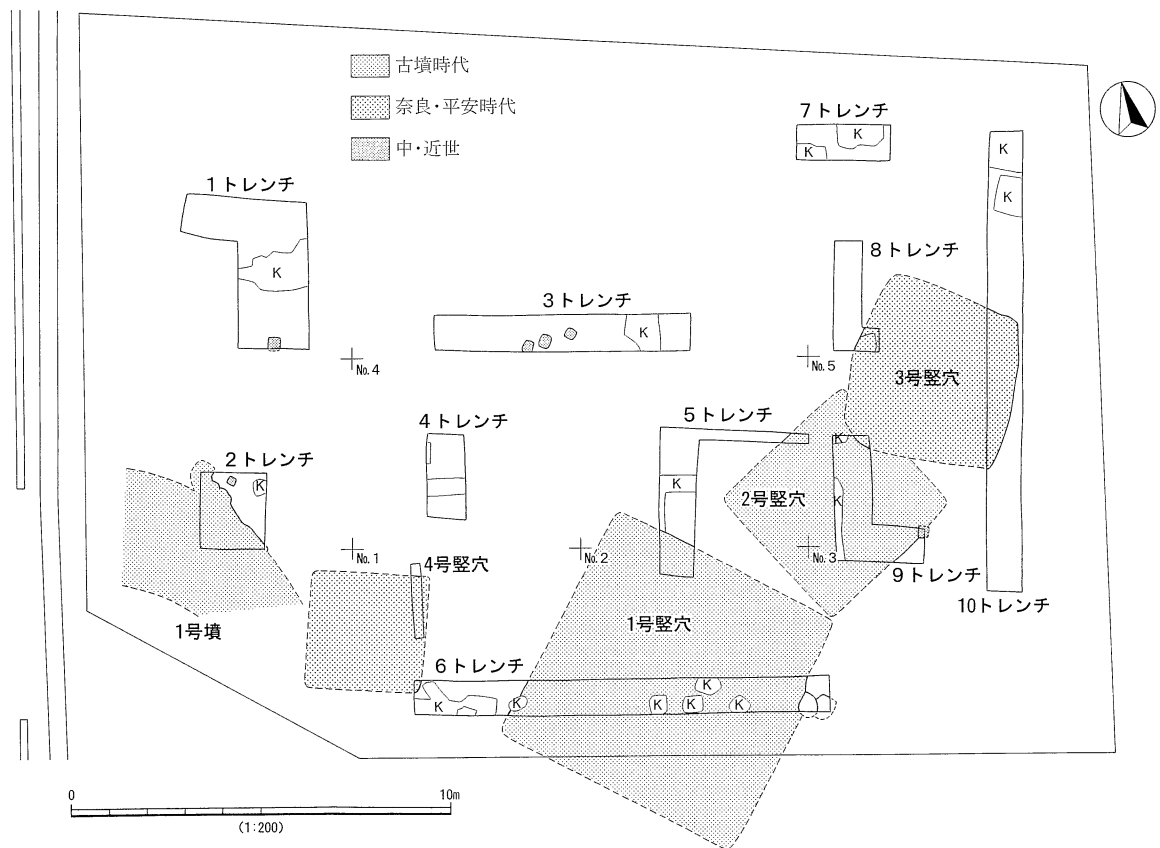
単位:g

遺構	No.	名称	材質	状況	注記	遺存度	長さ	幅	厚さ	重量
3号竪穴	2	不明品	鉄	貼り床下	10t床下	不明	(3.10)	1.46	0.11	2.7
1号竪穴	3	鍬	鉄	床レベル(周溝覆土上)	5t-2	80%	(7.20)	1.24	0.32	5.2

稲荷台遺跡K地点

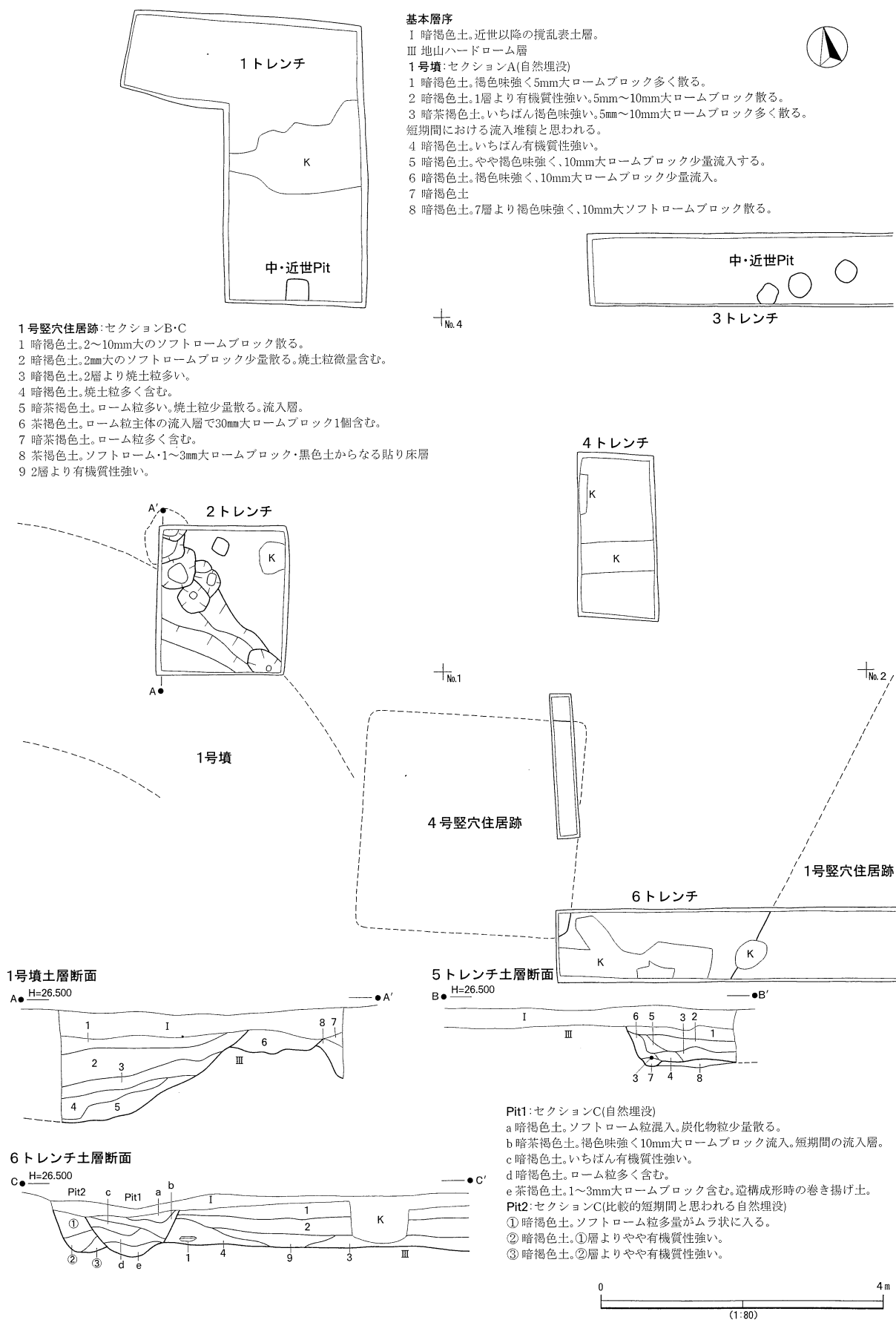


第2図 稲荷台遺跡K地点遺構配置図(註2)



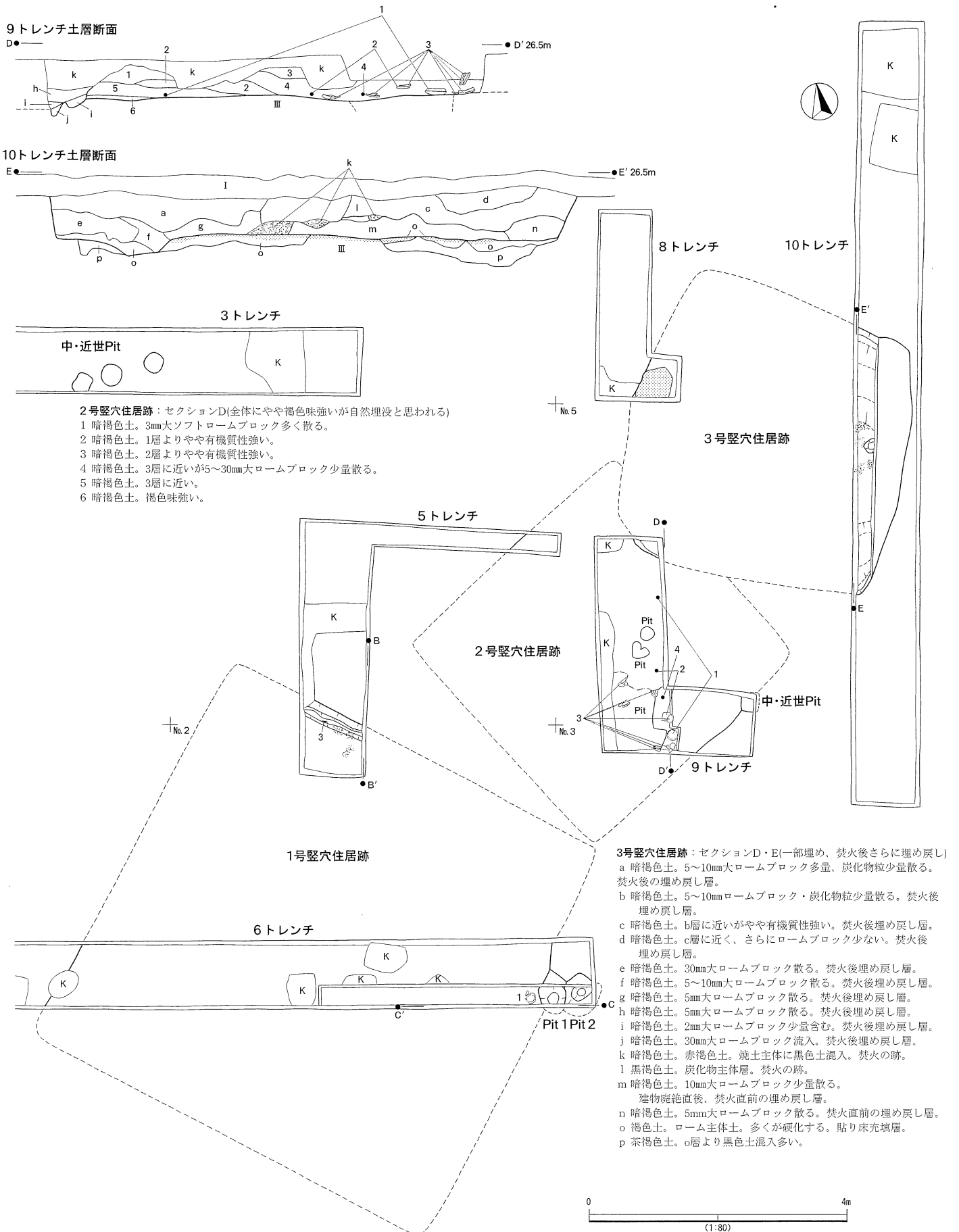
第3図 稲荷台遺跡K地点遺構配置図

稻荷台遺跡K地点

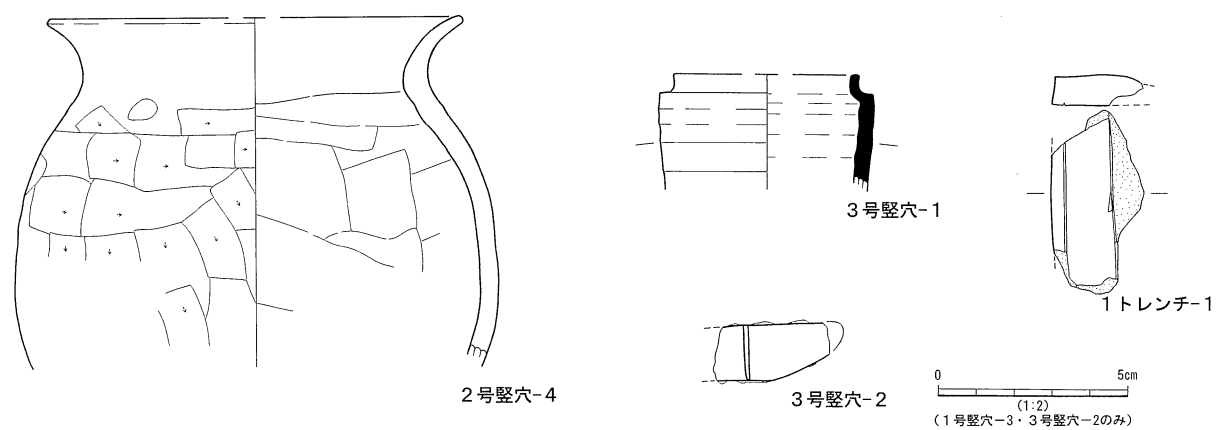
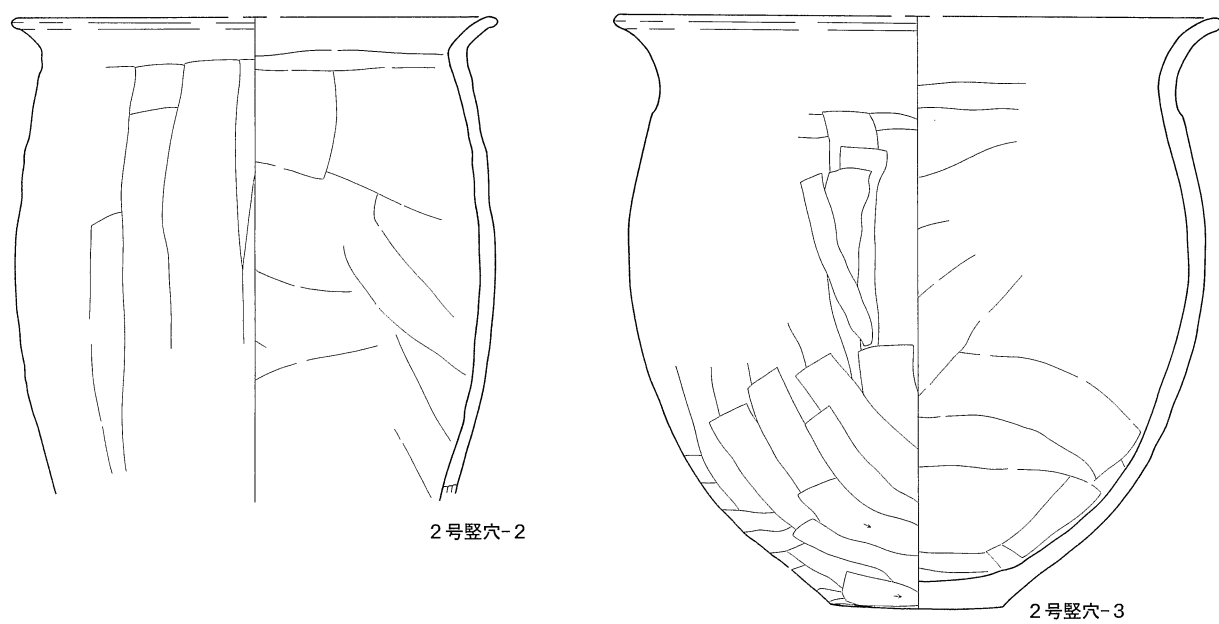
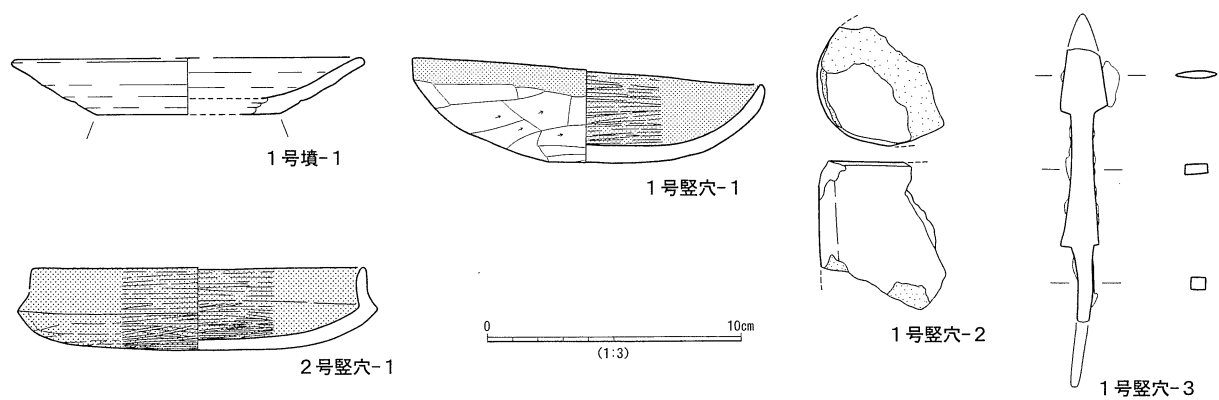


第4図 稻荷台遺跡K地点遺構図(1)

稻荷台遺跡K地点



第5図 稻荷台遺跡K地点遺構図(2)



第6図 稻荷台遺跡K地点遺物図

3 海士遺跡群十二天地区

調査区は、小湊鉄道沿線にあり、海士有木駅の南南東400mに位置する。北側に大宮神社が隣接し、東側を線路で画されている(第7図★)。今回の調査は遺構分布を捉えるための確認調査で、315.51m²の範囲を対象に4箇所のトレンチを設定して実施した。検出された遺構は、竪穴住居跡3軒(古墳時代後期～終末期、奈良・平安時代)、ピット14・溝2条・地山整形痕1箇所(時期不明)である。遺構の性格を確定するために覆土を部分的に掘り下げた箇所もあるが、出土遺物は全体的に少なかった。

001号 3トレンチで検出された東西方向の地山整形痕で、2トレンチ端でも一部が確認されている。覆土は淡い褐色で近世以降の所産と見られる。出土遺物はない。

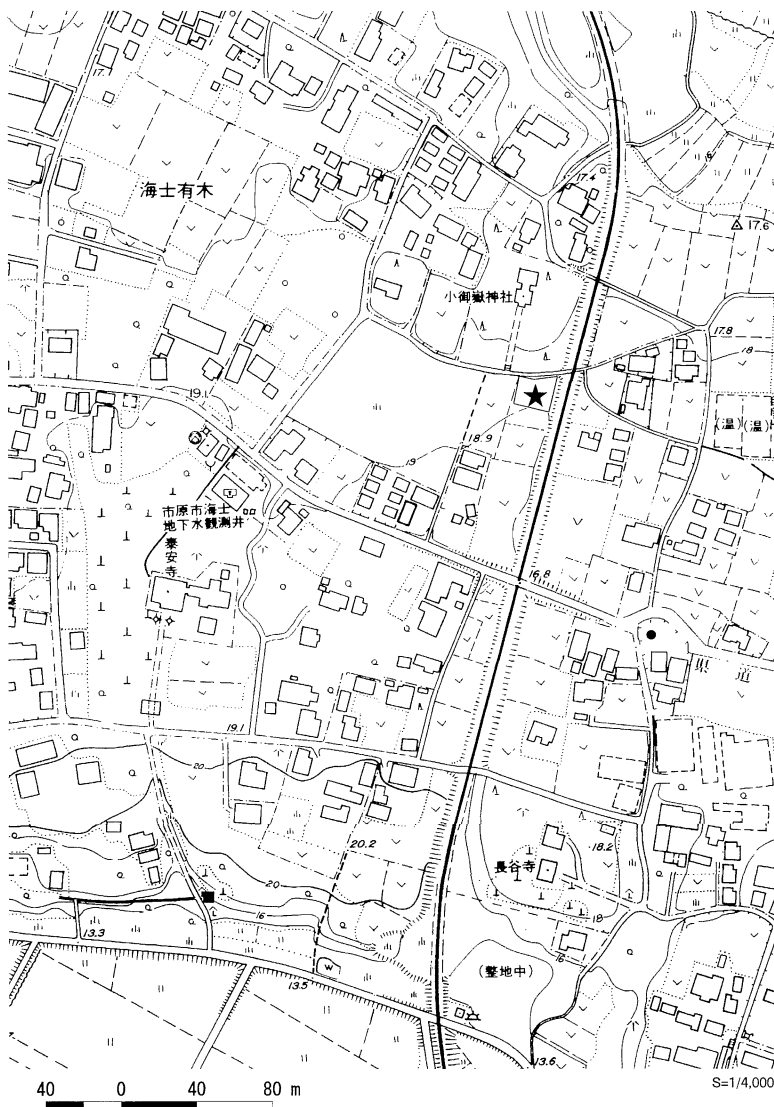
002号 4トレンチで検出された東西方向に走る時期不明の溝である。006号とは接続しない。出土遺物はない。

003号 1トレンチ西端で検出された方形竪穴住居跡である。4トレンチには及んでいないので、規模は4mを超えないことが確実である。ロクロ土師器杯と須恵器高台付杯が出土しており、遺構は平安時代に帰属すると思われる。

004号 1トレンチ東端で検出された竪穴住居跡である。床面は明瞭に硬化しており、一部にカマド由来かと思われる粘土ブロックが検出された。覆土上層より丸瓦片が出土しているが、覆土中には遺物がほとんどなく、時期の確定は難しい。しかし、調査区内で得られた土器片の傾向からすると、003号・005号に近い時期の遺構である可能性が高いと思われる。

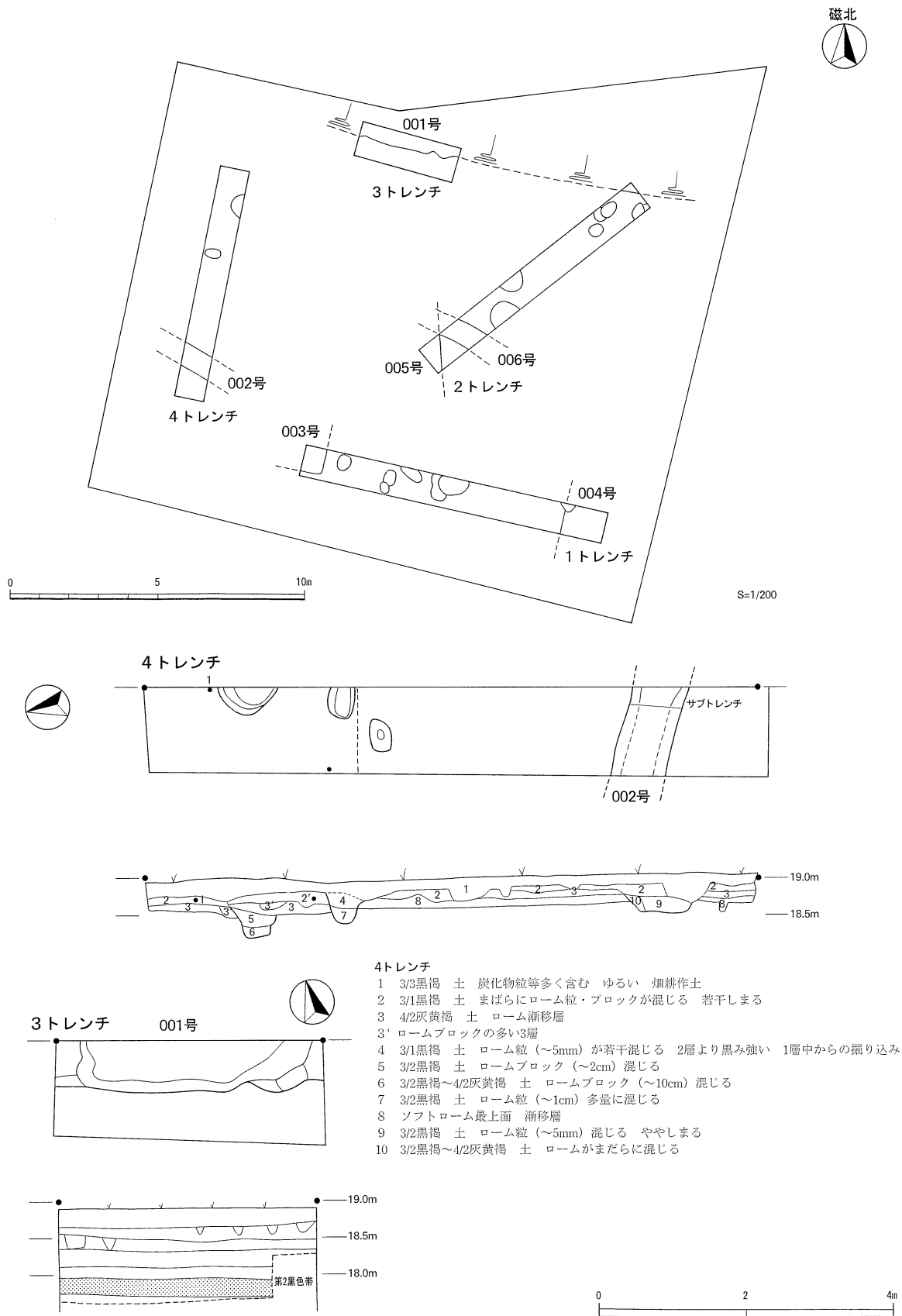
005号 2トレンチ南西端に検出された竪穴住居跡である。覆土中の土師器杯から、古墳時代後期から終末期の所産と考えられる。

006号 005号に接する位置に検出された溝状遺構で、覆土上面に明確な硬化面が認められたことから、道路として機能した可能性が高い。遺物は上層から、内面黒色処理の土師器碗等が得られているが、開削時期・機能時期ともに不明である。



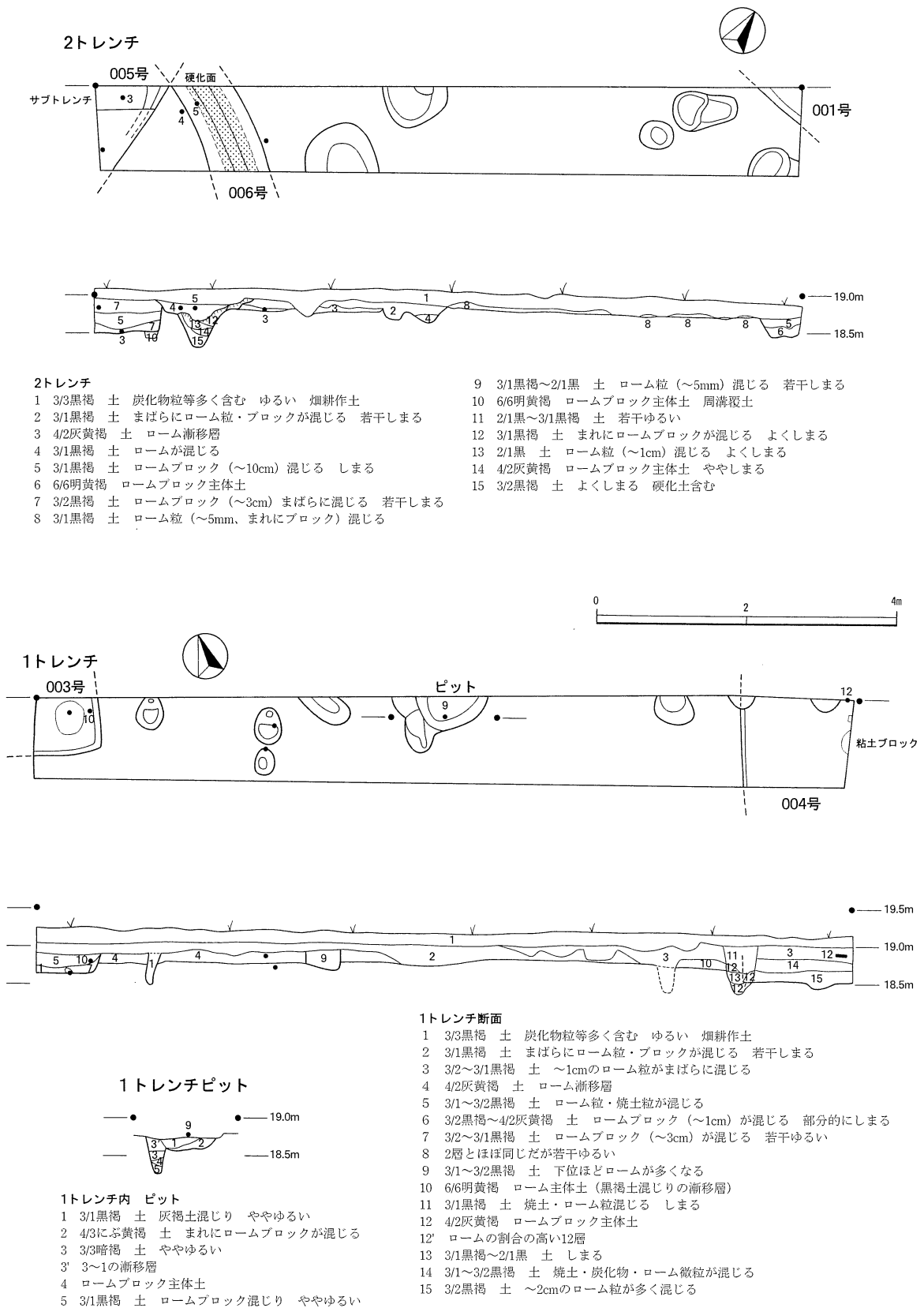
第7図 海士遺跡群十二天地区位置図

海土遺跡群十二天地区

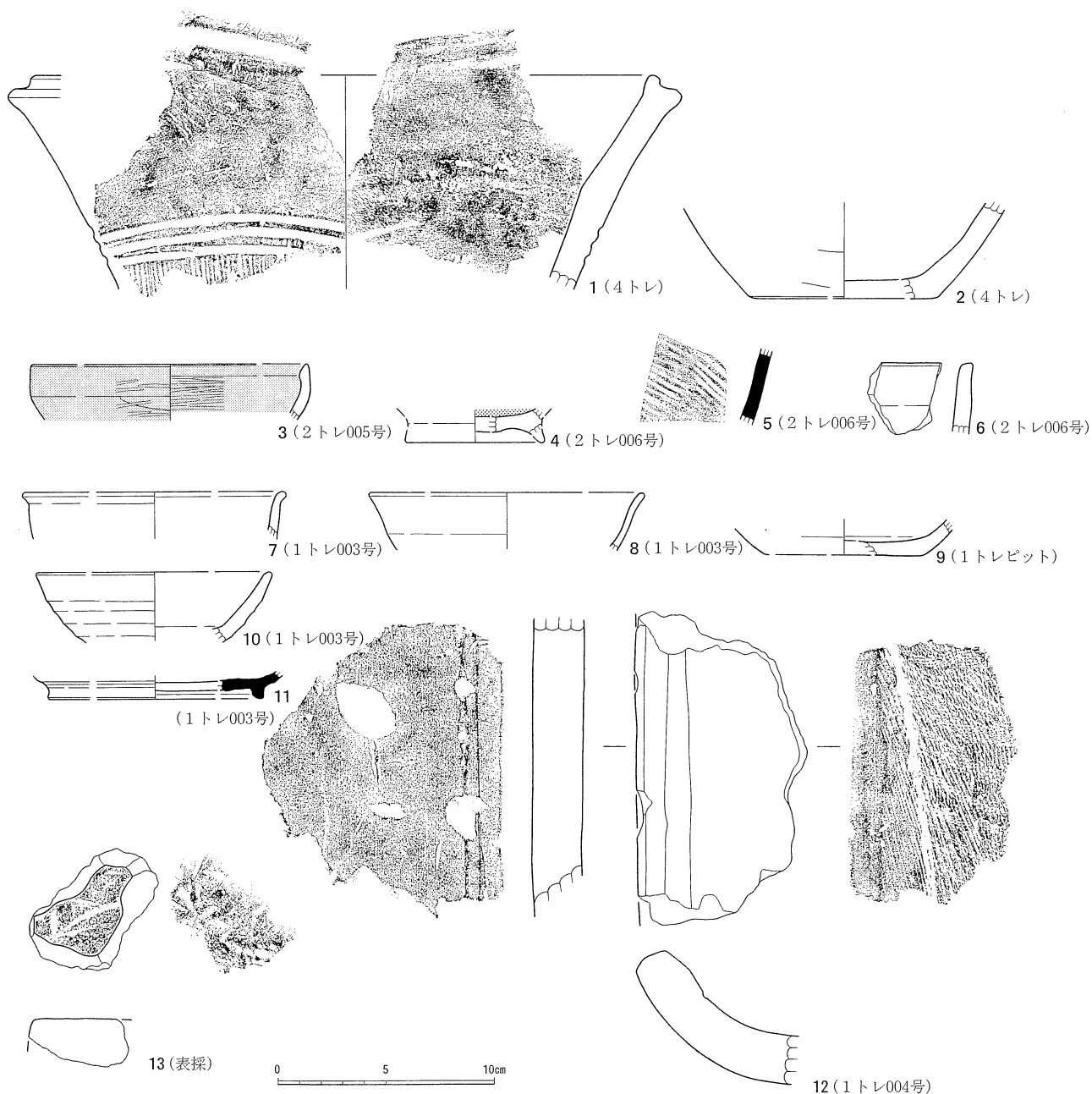


第8図 海土遺跡群十二天地区位置図(1)

海士遺跡群十二天地区



第9図 海士遺跡群十二天地区位置図(2)



第10図 海士遺跡群十二天地区遺物図

まとめ 今回の調査地は有木城跡推定範囲の北西部に位置する。有木城は、天正5(1577)年2月26日「里見義弘書状」『柿崎文書』・同『吉川金蔵氏所蔵文書』(千葉県2003)に表れる北条方の城郭で、東方の前回調査地点では、これと関連する可能性もある遺構が検出されている。しかし、今回の調査では平安時代以前の遺構・遺物しか確認されなかった。これが城郭の範囲外にあることを示しているのか、短命に終わった城郭の遺存度を反映しているのかは不明である。また、調査区南西に所在する泰安寺南方の台地下には市指定文化財の石造十三重塔(第7図■；西国由来の花崗岩製で大蔵派石工の技術系統と見られ、政治的背景をも持つとされる)も存在するが、この南北朝の所産とも関わりは認められない。このように、周辺では中世との関連を示唆する事象が見られるものの、古代以前の遺構・遺物しか確認されておらず、積極的に有木城の内容を明らかにすることはできなかった。

出土遺物 1：縄文土器(4トレンチ) 波状口縁を持ちその端面に1条の沈線が加えられる。外面は口縁と3条の沈線の間に無文帯を置き、以下に縦の櫛歯状文が施される。内面は、屈曲途中に明確な稜が作られている。2：土師器甕(4トレンチ) 外面はヘラケズリもしくは工具ナデ。3：土師器杯(2トレンチ005号) 外面は口縁部がヨコナデ、屈曲以下が横ヘラケズリ。赤彩・ヘラミガキされる。内面は赤彩・ヘラミガキ。4：ロクロ土師器内黒椀(2トレンチ008号) 外面は高台貼り付けとヨコナデ、内面は黒色処理とヘラミガキ。5：須恵器甕(2トレンチ008号) 外面は平行タタキ、自然釉で光沢を持つ。内面はナデ。6：土師器甕(2トレンチ008号) 内外面とも口縁部はヨコナデ。7：土師器杯・椀(1トレンチ003号) 内外面ともヨコナデ。口縁端部は外側に引き出される。8：ロクロ土師器杯・皿(1トレンチ003号) 内外面ともヨコナデ。薄手の作り。9：ロクロ土師器杯(1トレンチピット) 外面は底面・底部付近に回転ヘラケズリ。内面はヨコナデ。10：ロクロ土師器小型杯(1トレンチ003号) 外面は凹凸の明瞭なヨコナデ。内面はヨコナデ。小ぶりなので灯明皿の可能性も考えられる。11：須恵器杯(1トレンチ003号) 外面は高台貼り付けとヨコナデ、内面はヨコナデ。12：丸瓦(1トレンチ004号) 外面はヘラケズリとナデ。内面は綴じ跡のある布目圧痕。褐色に焼き上がる。13：瓦(表採) 外面は縄目タタキ。内面は布目圧痕。灰色の焼き上がり。

文献

安藤 登 1998 「市原市指定重要文化財 有木城跡石造十三重層塔について」『上総市原』10 市原市文化財研究会
千葉県 2003 『千葉県の歴史』資料編 中世4 (県外文書1)

4 辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区

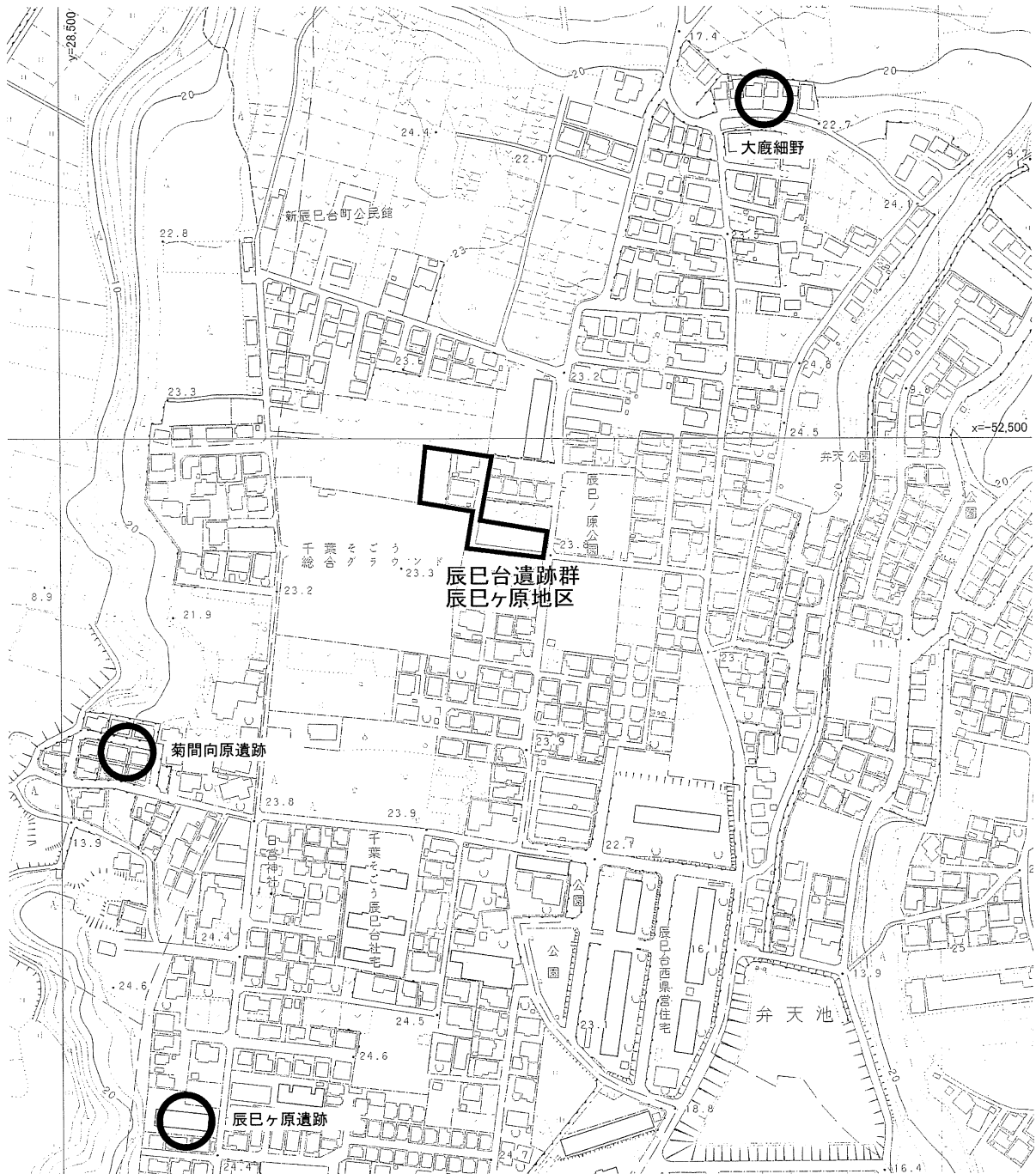
個人住宅建設に伴い、対象面積796m²について確認調査を行った。調査区の現況は畑と荒蕪地であり、縄文土器と土師器が濃密に散布していた。調査は、対象区域の形状に合わせて4本のトレンチを設定し、平均40cmの耕作土を除去して遺構の検出を行った。その結果、縄文早期後葉の炉穴2基と土坑1基、弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡4軒と土坑？1基を検出した。遺物は、遺構内外から縄文早期後葉の土器210点、弥生後期～古墳時代初頭を中心とする土器45点、縄文時代石器、貝類等が出土した。

1号 1トレンチの南端で遺構の一部を検出した。長径1mほどの楕円形の掘り込みが想定される。覆土を一部掘り下げたところ、1・2層を中心に条痕文土器16点、礫1点が出土した。3層には赤褐色ロームブロックを含んでおり、炉穴の可能性もあるが、不明確であるため土坑としておく。第14図1～7を掲載した。1～4は有文土器で、2段の屈曲をもち、押引による意匠文、押引または刺突による充填文が施される。5～7は内削ぎ状口縁の無文系土器である。全体に整形時の条痕文はナデ消されて擦痕をもつものが多い。遺構の時期はこれらの土器が示す茅山下層式の古段階と考えられる。

3号 1トレンチで西壁にかかる不整形の掘り込みを検出し、一部を掘り下げた。条痕文土器16点、石核1点、礫2点が出土し、下部には焼土が多かったため炉穴と判断された。焼け面を完全に掘り下げるのは避けたが、底面には段が認められたので、複数の炉穴が重複しているものと推定される。第14図9は1号土坑と同様の押引文意匠の土器であろう。10は尖頭状口縁の無文系土器である。

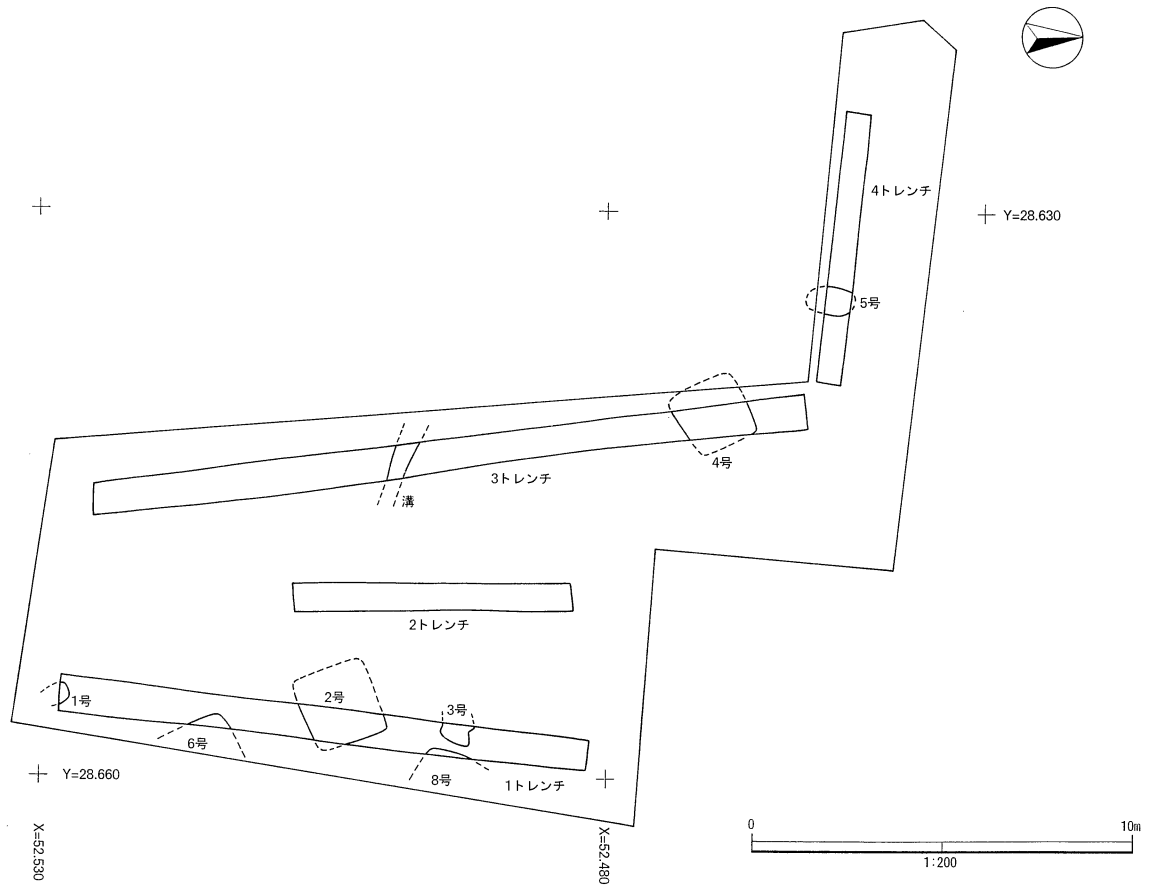
5号 4トレンチの東西の壁にかかる楕円形の掘り込みを検出し、一部を掘り下げたところ、マガキ主体の貝層が現れ、貝層下からは完形の石皿、条痕文土器5点が出土した。底面は焼けており、縄文早

辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区



第11図 辰巳台遺跡群位置図

期後葉の炉穴と判明した。第14図12は4単位の波状口縁土器である。2段の屈曲を有し、口縁部文様帯は隆帯と凹線文により区画し、区画内に弧状凹線文を描く。残された部分は微隆帯状を呈し、刺突を施す。頸部には押引による区画と意匠文を施す。最大径17cm、高さはせいぜい25cmほどの小型の土器である。13も押引文がみられる。第15図24は完形の石皿である。両面に研磨が認められるが、その状態は異なる。図左側の面はやや黒ずんでいて、表面がすべすべしているのに対して、右側の面は色調が明るく、ざらついている(図版10拡大写真)。前者は使用による変化を、後者は加工時の状態を示すものと推定される。なお、周囲の欠損状の部分も研磨されている。このように扁平な転石を利用して、磨面があまり窪まない形状の石皿は、早期後葉に特徴的なものである。多摩丘陵ではこの時期に同様の石皿とともに、磨石が多数出土して石器組成の中心となっており(阿部1989)、下総台地でも数は少ないが同様の石皿が



第12図 辰巳台遺跡群調査区全体図

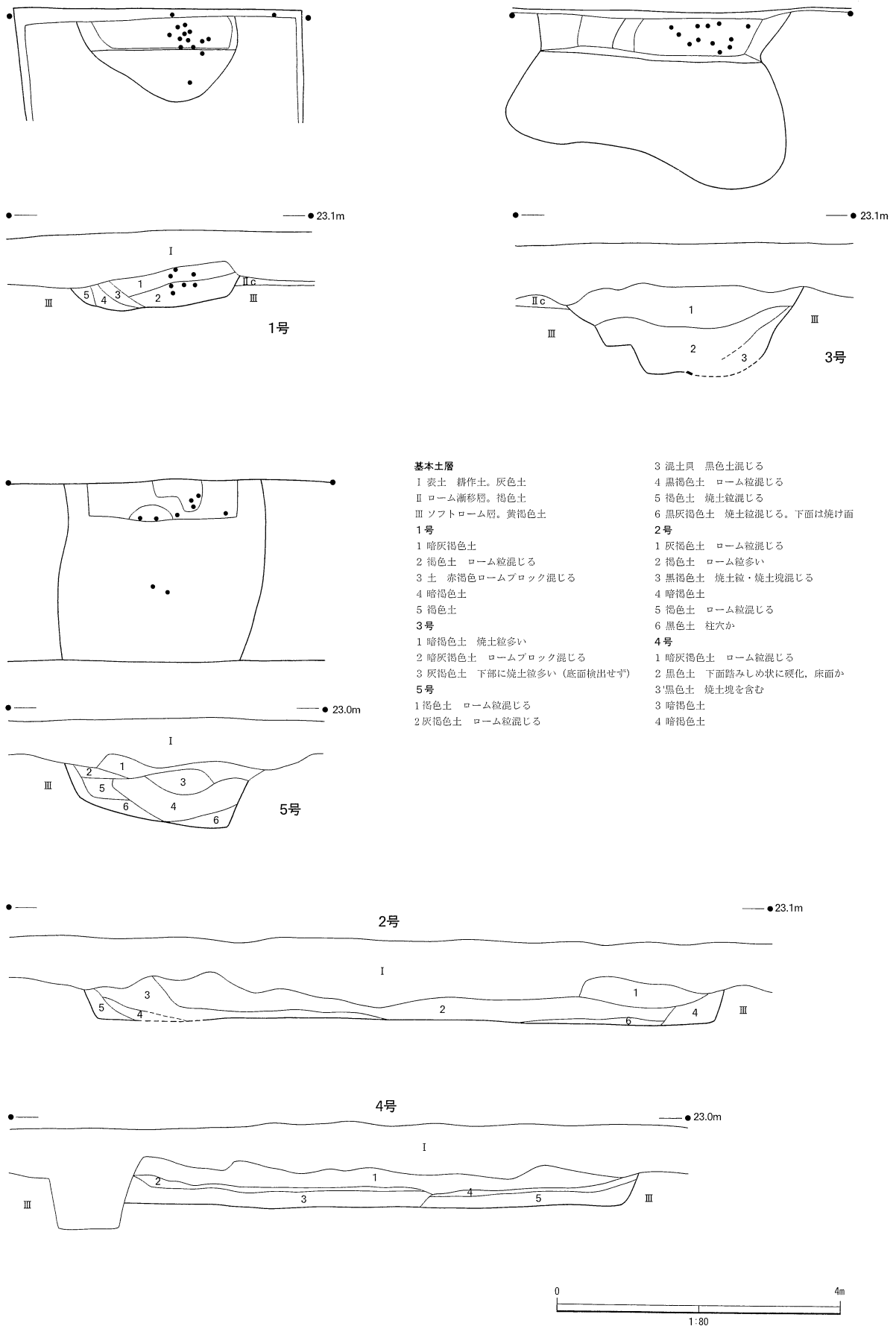
この時期に出現する。例えば船橋市飛ノ台貝塚の石皿も同様の形状である(西川1978)。

2号 1トレンチの東西壁にかかる方形の掘り込みを検出した。一部の掘り下げにより、確認面下20cmほどで硬化した床面を検出した。出土遺物は第15図27～29の3点がすべてである。27は口縁部径5.5cmの小型壺であり、弥生時代末のものであろう。28は高杯とみられる。脚部の上端で径5.7cmあり、高杯とすればかなり太い脚となり、また、脚部との接合痕は大きく張り出す。受け部は平坦な底をもつ。違和感を持たざるを得ないが、弥生時代末の高杯であろうか。29は縄文をもつ時期判断の困難な土器である。丸底を呈すが、底部内面は平坦であり、焼成は良好で叩き締めたように硬質である。縄文は著しく重複して明らかな回転施文を認めることができず、単位ごとに窪んでいる点からみれば縄目叩きの可能性も排除できない。縄文土器とするには躊躇せざるを得ず、時期不明としておく。遺構の時期は、周囲からも小型壺に近い時期の破片が目立つことから、弥生時代末ないし古墳時代初めころの蓋然性が高い。

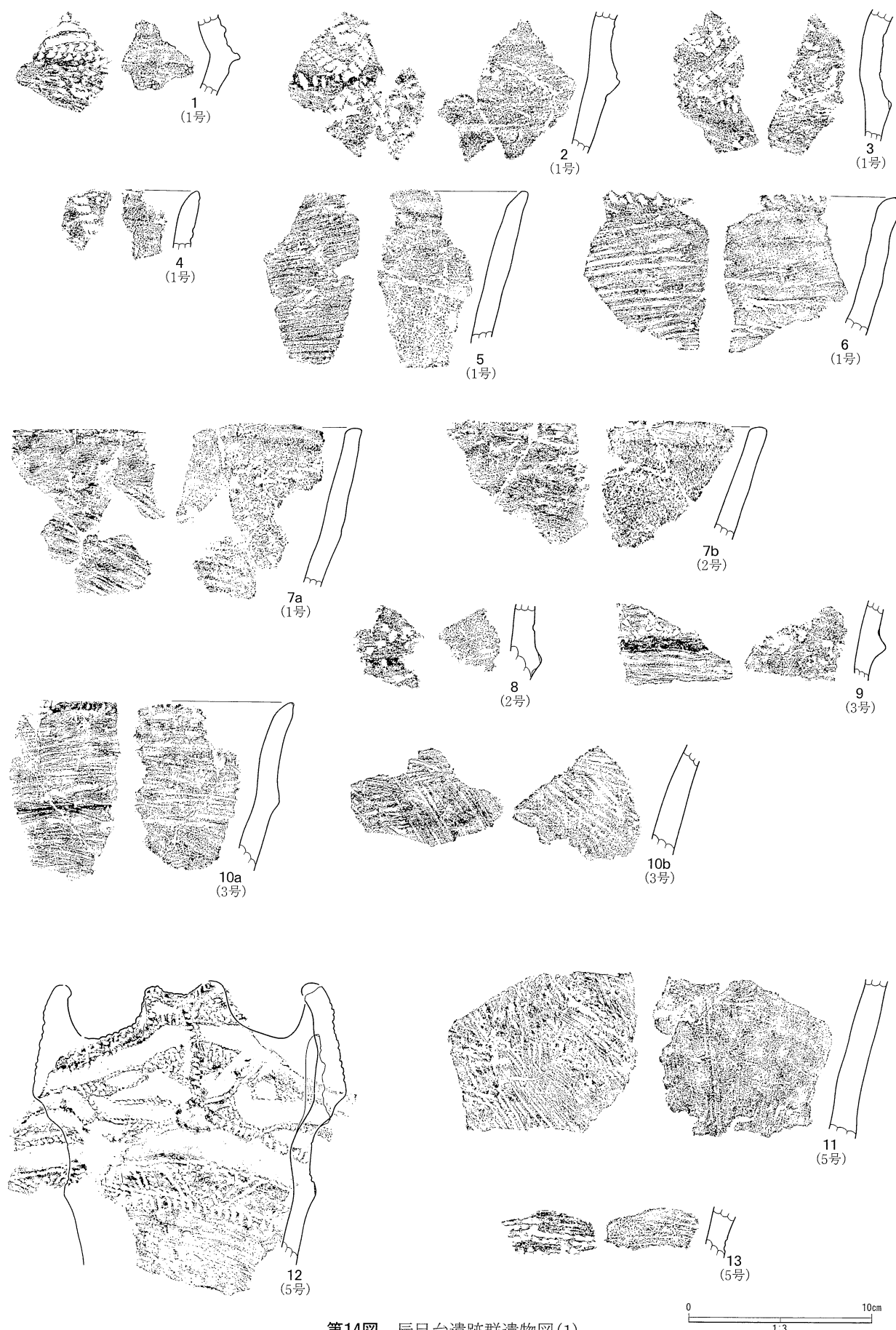
4号 3トレンチ東西壁にかかる方形の掘り込みを検出した。一部掘り下げたところ、確認面下20～30cmほどで硬化床面を検出した。弥生時代末ころに多いハケメをもつ土器を中心とした土器片が13点出土しており、この時期の竪穴住居跡と推定される。第15図30は小型壺、31は甕である。なお、土層断面図3層上面も平坦であり、床面状の硬化が認められた。竪穴住居等が重複している可能性がある。

6号 1トレンチの東壁付近で竪穴住居跡の隅の可能性のある掘り込みを検出した。確認面付近で、すでに底面が露出し、床面のごく一部を検出したのみで出土遺物がなく詳細は不明であるが、周辺から回収した弥生・土師器が概ね上記の時期に限られることから、この時期の遺構である可能性が高い。

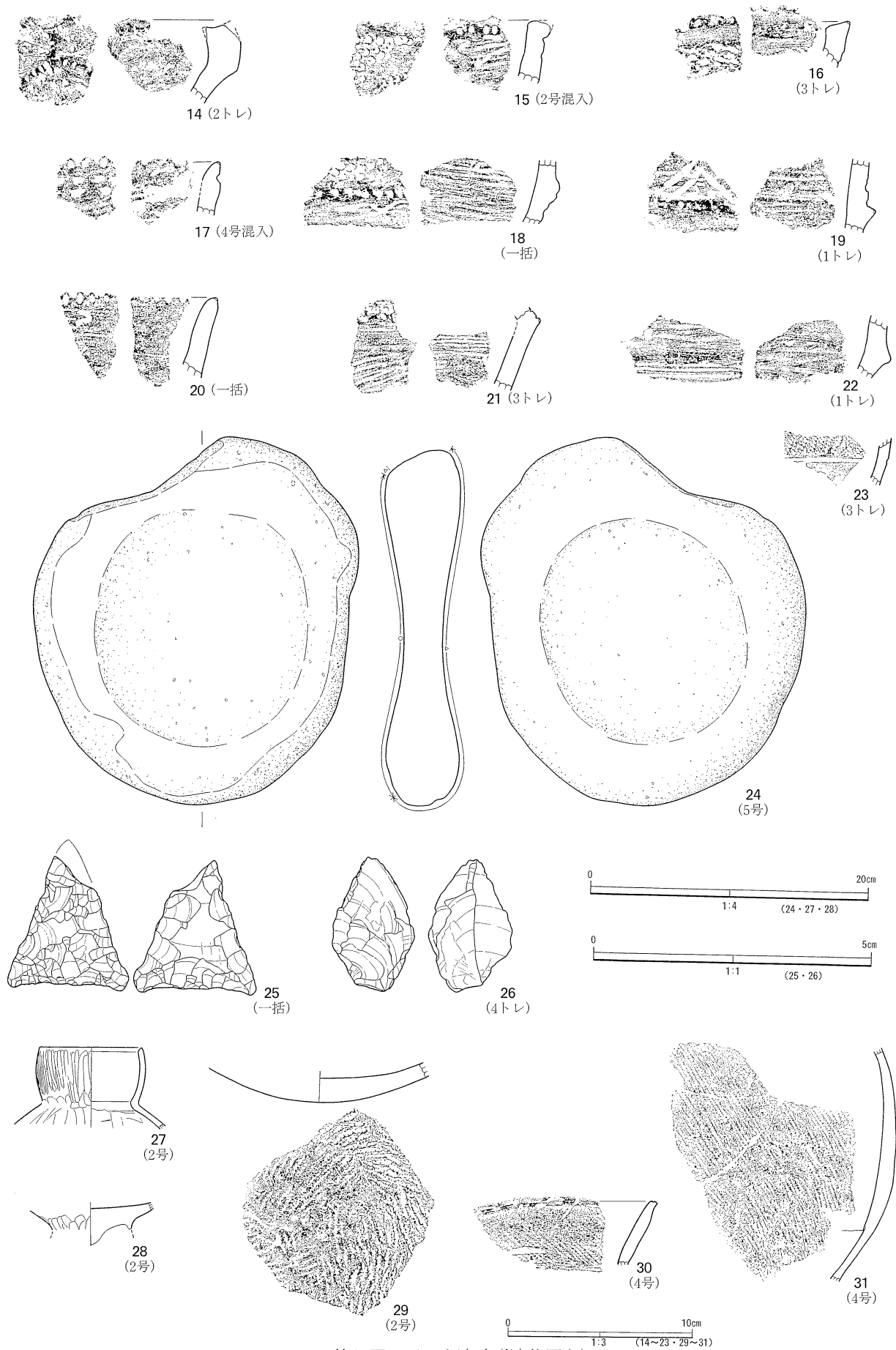
辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区



第13図 辰巳台遺跡群遺構図



第14図 辰巳台遺跡群遺物図(1)



第15図 辰巳台遺跡群遺物図(2)

8号 1トレンチの東壁にかかる竪穴住居跡の隅に似た掘り込みである。ごくわずかな範囲を検出したのみで出土遺物がなく、時期・性格は不明であるが、周辺から回収した弥生・土師器が概ね上記の時期に限られることから、この時期の遺構である可能性が高いものとする。

縄文早期後葉の集落 縄文土器は後期後半の土器1点以外は、非掲載も含めた210点の全てが条痕文土器であった。第15図25の石鏃、26の加工をもつ石器や合計12点出土した礫等もこの時期のものが中心であろう。土器が多く、貝層を伴い、植物質食材の加工具類が存在することから、この時期としては比較的規模の大きな集落であったことを想定できる。市原市には炉穴群をもつ集落が多いが、前半期にあたる子母口式～野島式期を中心とする例が多い。当遺跡は、諏訪台古墳群(整理中)、上原台遺跡(田中清美他1992)、草刈六之台遺跡(上守・西野他)とならんで、後半期を代表する集落となる可能性が高い。今回の調査区で遺構密度が薄いのは、台地の中心部に近いためであろう。この時期の集落は台地縁辺部に集中する例がほとんどであり、調査区より東側に中心がある可能性が高い。

出土土器の示す時期 確認調査の資料であって詳細な検討は難しいが、全体として鵜ヶ島台式と茅山下層式の移行期に近い、比較的时期的にまとまった資料とみられる。この土器を取り上げた<渡辺1993>の分類によると、鵜ヶ島台式の新段階、最新段階の土器に見られる交差部刺突文、円形刺突文、格子状の意匠などが当遺跡出土時にはほとんど見られない。茅山下層式の古段階が中心とみられる。なお、押引文の工具痕は平らで、ささくれ立った多截竹管を使っていると思われるものが目立っていた。

貝サンプルの分析 5号炉穴の貝層部分について、貝層上半、下半、貝層下土層各10cmの厚さでサンプルを採取した。サンプルは、10・4・2mmメッシュの試験用フルイを用いて水洗選別し、貝類は4mm以上を集計した。二枚貝は左右別に集計し、多いほうを最小個体数とした。全体に貝殻の保存が悪く、計測可能個体は少なかったが、マガキのみ数点計測を行った。2mmも含めた貝類以外の検出物は、若干の魚骨と炭化植物遺体である。なお、魚類の同定は現生標本との比較により鶴岡

第3表 辰巳台遺跡群貝サンプル

		5号炉穴			
		cut1	cut2	cut3	合計
貝類	種名				%
	ハイガイ	1	1		2 1.4%
	4mm以上 マガキ	115	5	1	121 86.4%
	シオフキガイ	3	6		9 6.4%
	マテガイ	0	1		1 0.7%
	ウネナシトマヤガイ	1	2		3 2.1%
	ハマグリ	3	1		4 2.9%
合 計		123	16	1	140 100.0%
2mm以下	貝類				
	オカチヨウジガイ	6			6
	ヒメコハクガイ	1			1
その他	ウネナシトマヤガイ幼貝	6	2		8
	魚骨		1	1	2
	炭化種子		1		1
縄文土器片		1		15	16
水洗後全重量g		1241	493	688	2422

英一が行った。第3表にはカットごとの同定結果を示したが、cut2以下には貝類はごく少ない。土器片がcut3に多いのは、貝層下に集中していたことによるものである。貝種組成はマガキが86.4%と大半を占める。シオフキガイ、ハマグリ、ハイガイ、マテガイも食用に採取されたものであろう。ウネナシトマヤガイは4mmメッシュの3点も含めてすべて幼貝であり、マガキに付着して持ち込まれたものとみられる。マガキの殻高は、7点の平均±標準偏差が58.77±10.15mmであった。あまり大きくない成貝が中心のようである。左殻の付着痕から、カキ礁を形成していたものとみられる。魚骨は紛失した1点を含め3点検出しており、うち1点はイワシ類(ニシン科Clupeidae)種不明の尾椎である。この時期の小規模貝層には骨がまったく含まれないのが普通であるので、わずかとはいえ、この量のサンプル中に複数の魚骨が入っていたことは、偶然とは考えにくい。

文献

阿部芳郎 1989 「縄文早期末葉石器群の技術的特徴と構成」『半蔵窪遺跡調査報告書』 東京純心女子学園

- 市原市教育委員会 1988 「菊間向原遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』
 市原市文化財センター 1994 「大庭細野遺跡」『市原市文化財センター年報昭和63年度』
 上守秀明・西野雅人他 1994 「縄文時代」『千原台ニュータウンVI』 千葉県文化財センター
 武部善充 1982 『辰巳ヶ原遺跡』 山武考古学研究所
 田中清美 1992 『奉免上原台遺跡』 市原市文化財センター
 田中清美 1999 「辰巳ヶ原遺跡」『市原市大庭辰巳ヶ原遺跡・八幡御所跡推定地』 市原市文化財センター
 永沼律朗他 1995 「大庭二子塚古墳」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』 千葉県教育委員会
 西川博孝 1979 「石器」『飛ノ台貝塚 発掘調査概報』船橋市教育委員会
 渡辺修一 1993 「鵜ヶ島台式土器から茅山下層式土器へ」『千葉市地蔵山遺跡(2)』 千葉県文化財センター

5 姉崎二子塚古墳

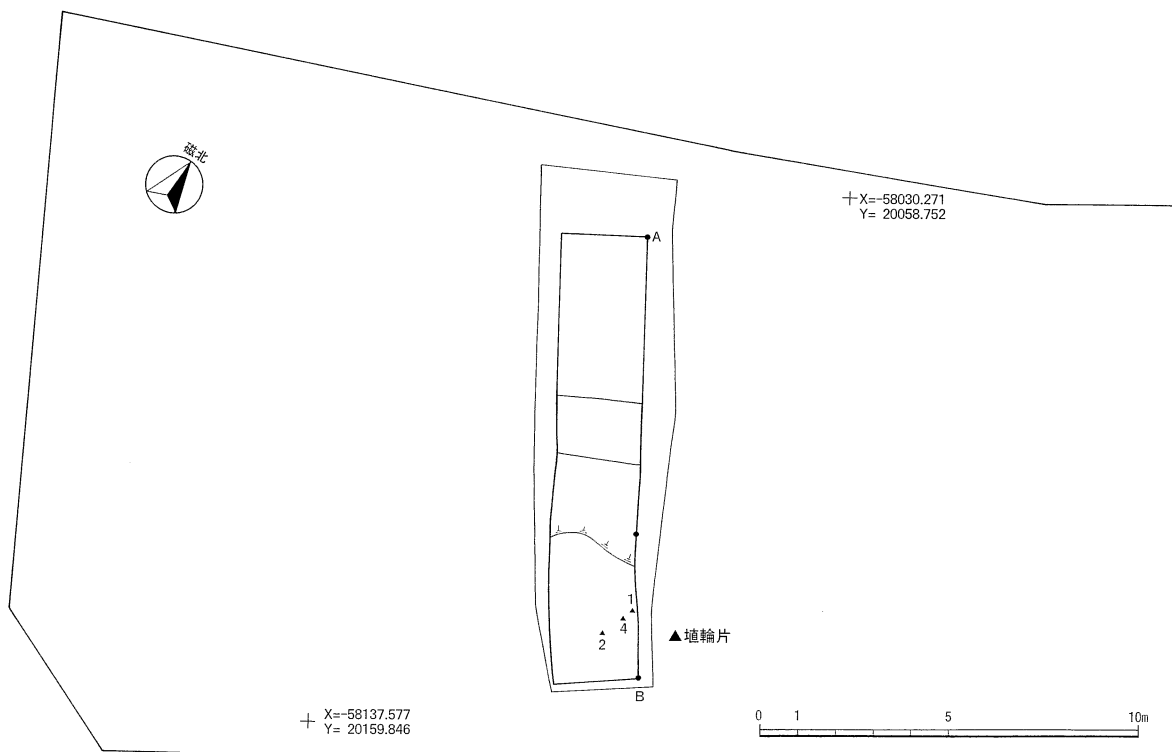
調査地点は古墳の北側、推定されている盾形周溝の範囲内であり、個人住宅の建設が予定されたため、この部分に周溝が存在するか否か、及びその状態を知る目的で50m²の確認調査を実施した。調査は、実際に建物が建設される部分を避けるかたちでトレンチを設定しておこなった(第16図)。周溝の存在と状態把握を目的とすることから、周溝の推定範囲に概ね直行するラインに幅約3.5m・長さ14mのトレンチを設定した(第17図)。調査区全体は、かつて水田として利用されており、水位が高く地盤が軟弱な上に分厚い客土で覆われていたため、掘削した壁面の保護と湧水の除去を余儀なくされた。したがって、人手による掘削範囲が自ずと限られ、層位的に土壌やこれに含まれる遺物の把握ができたのは、トレンチの南側・墳丘寄りの部分となった(第17図)。この箇所では、1.4mの客土の下から旧耕作面が現れ、下部には20cmほどの厚さでイボキサゴを主体とする貝肥を含む層が確認された。この部分を取り除いた標高4.6mほどの箇所から粘性の高い暗褐色のシルト質の層(断面図中の3層)が現れ、内部に円筒埴輪破片が含まれることが確認された。この層は、厚さ10～15cmと薄い、この下の砂堆基盤とみられる浅黄色の砂層との境界面から埴輪片(いずれも水磨を受け器壁面が荒れている)が張り付くように出土することが確認できた(1・2・4)。標高はおよそ4.5mである。砂堆基盤層は、これより北側へいくと青灰色の砂層となり、標高もやや下がり4.1～4.2mほどとなるが、北側のトレンチ末端までほぼ水平レベルを保っている。結局、トレンチ内では北側の周溝の立ち上がり部分を検出することができなかったが、貝肥下から発見された3層は遺物の出土状況などから考えて古墳周溝覆土の最下層とみられる。トレンチの外側に周溝の立ち上がりを確認される可能性もあるが、今回の調査区付近は、地形図によると砂丘帯の海側の末端にあたり、本来溝を掘り込むことが困難だったことも予想され、きっちりとした掘り込みがなかった可能性も否定できない。

円筒埴輪の破片は20点ほど出土しているが、図示可能なものは8点である(第18図1～8)。いずれも色調は明褐色から茶褐色で、胎土に粗い砂粒や小礫を混入する。タテ方向のハケメのみがみられるもので、8は内面にもハケメがみられる。タガの部分は上端をつまみ出した断面M字形で、上端幅は狭く鋭いつくりである(1～3)。7は基部の破片である。9は3層上部から出土した高杯脚部片である。なお、トレンチ中央部からは、トレンチに直行するかたちで深さ15cmほどの溝状遺構が発見されたが、遺物が皆無であるため時期は不明である。また、砂堆基盤とみられる浅黄色および青灰色の砂層中から、著しい水磨を受けた縄文土器とみられる破片(10)、両面中央に敲打痕とその周囲に磨耗痕がみられる礫石器(11)が出土した。

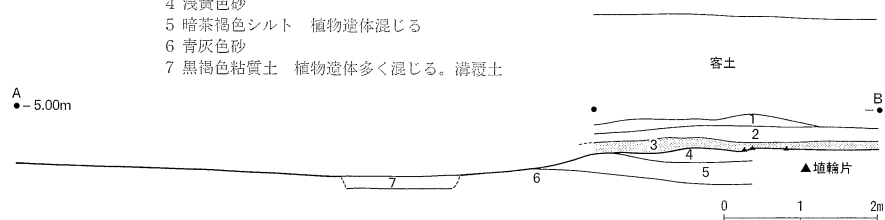
姉崎二子塚古墳



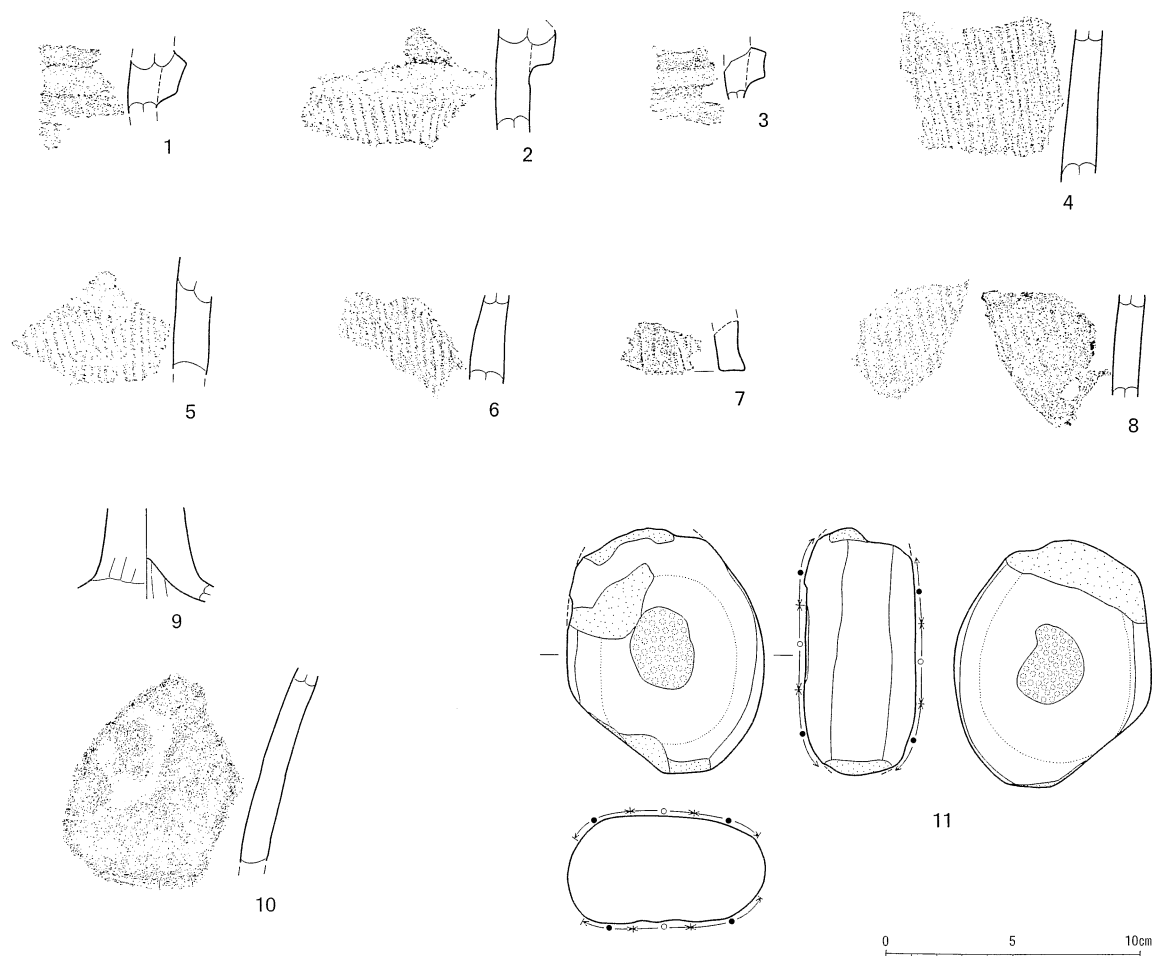
第16図 姉崎二子塚古墳と調査区位置図



- 1 暗褐色土 旧水田耕作土
- 2 灰褐色シルト イボキサゴ主体の貝肥混じる
- 3 暗褐色シルト 粘性高い。古墳周溝覆土
- 4 浅黄灰色砂
- 5 暗茶褐色シルト 植物遺体混じる
- 6 青灰色砂
- 7 黒褐色粘質土 植物遺体多く混じる。溝覆土



第17図 姉崎二子塚古墳遺構図



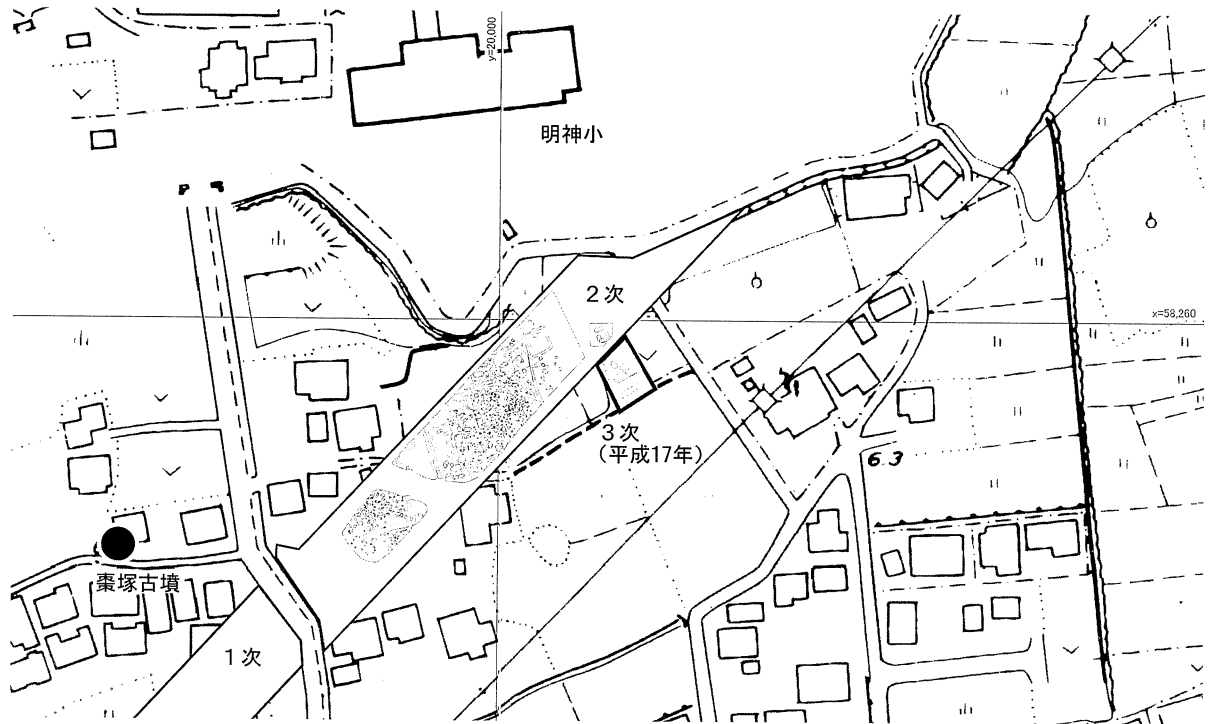
第18図 姉崎ニ子塚古墳遺物図

6 棗塚遺跡

第3次となる今回の調査地点は、明神小学校校庭の南側、1・2次調査が行われた都市計画道路に隣接する畑である。確認調査は対象面積の10%にあたる3本のトレンチを設定し、遺構・遺物の広がりをつめた。その結果、2トレンチと3トレンチで粘土の入った土坑を検出し、2次調査で検出した土坑群が、今回の調査区内まで広がりをもつことが確認された。本調査は、工法の関係で遺構の保存が難しい宅地部分82㎡について行うこととなった。3トレンチについては協議の結果、遺構を保護できると判断されたため、確認調査のみで埋め戻した。確認調査・本調査を通じて検出した遺構は、土坑8基、小穴1基、溝1条であり、いずれも中近世のものとみられる。第4表には、近世以降を除外した出土遺物

第4表 棗塚遺跡出土遺物

種類	2号	3号	7号	2トレ	一括
縄文土器	—	—	—	—	2
土師器	—	—	—	—	8
古代陶磁	—	—	—	—	1
中世					
常滑					1
甕					1
片口鉢Ⅱ類					2
瓦質土器・土器					
東海系羽釜					1
片口鉢Ⅱ類					1
焙烙?	1	1			
カワラケ(大窯1~2並行期)	2	1		1	
カワラケ(詳細不明)	1				1
管状土錘					1



第19図 棗塚遺跡調査区位置図 (1:2,000)

の全体を示す。若干であるが縄文土器、古代の土器類が存在した。

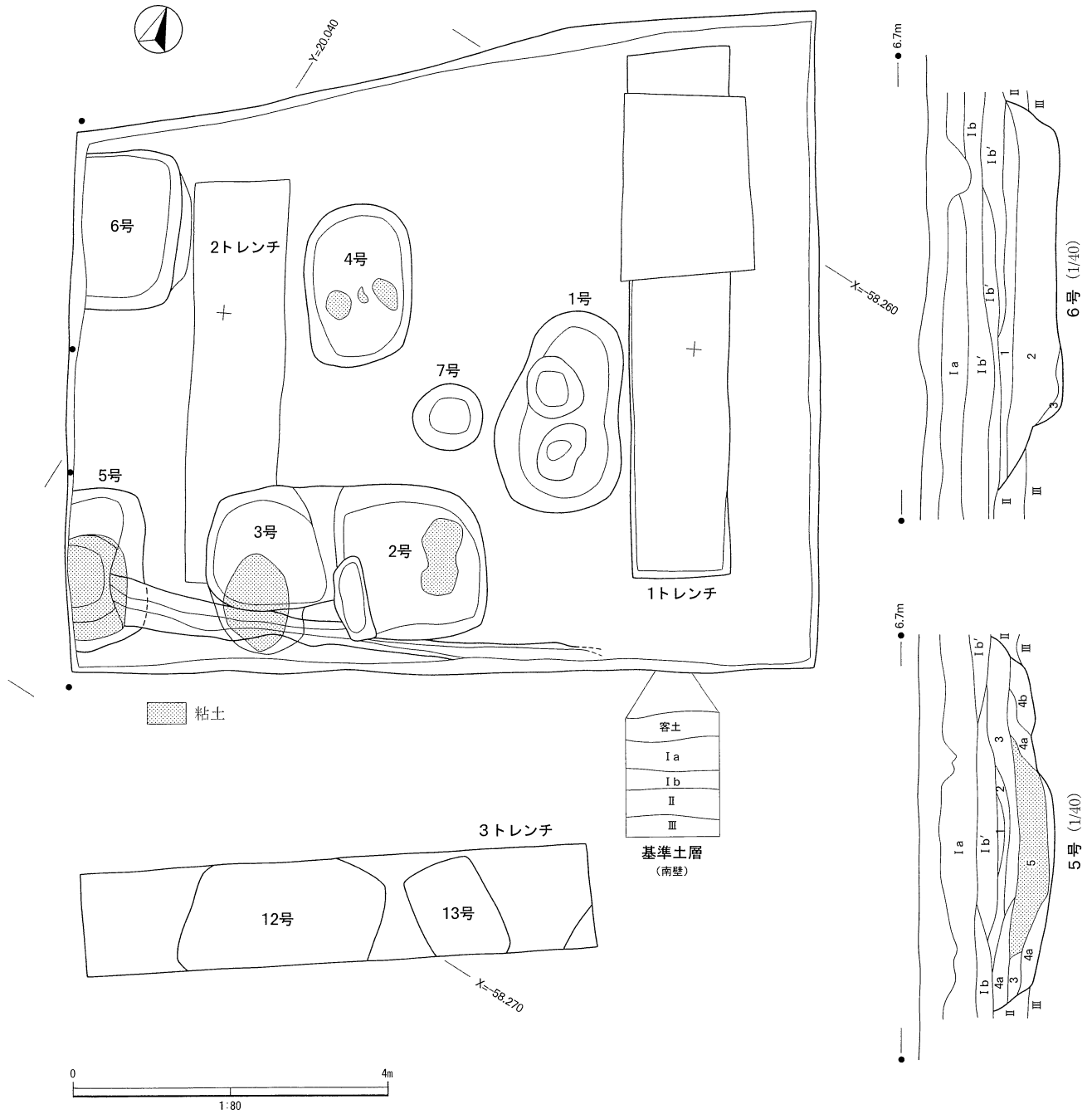
1号土坑 長さ2.5m×最大幅1.6mの不整楕円形の掘り込みである。底面は比較的平坦だが、図のような浅いくぼみをもち、立ち上がりは緩やかである。人為的な掘り込みであるかどうか明確でないが、覆土は他の土坑と同様の黒褐色有機質砂で、粘土は含まれていなかった。出土遺物はない。

2号・3号土坑 粘土入り土坑が2基重複している。底面の深さが同じであり、それぞれの形状や新旧関係は不明確である。掘りあがった状況からみると、東側の2号が2.0×2.0m、西側の3号が1.6×1.5mの隅丸方形を想定できる。ただし、上層の粘土の範囲からみて、3号も2号と同様の規模であった可能性が高い。深さは0.4m、底面は平坦で、壁は垂直に近い。いずれも、覆土は黒褐色有機質砂が中心で、上層に灰白色粘土粒が混じる薄層をはさんでいる。粘土の混じる範囲は、2号で1.0×0.5m、3号で1.1×0.8m程度であった。なお、3号は9号溝より新しい。第20図1は2号・3号の両方から出土した素焼きの土器類で、全体の2／3程度が遺存する。最大径19cm、高さ3cmを測り、上げ底状を呈する。類例に乏しく、器種や時期の判断が難しい。土師器広口壺の蓋にも似るが、中近世には器種として存在しないため、焙烙の可能性が高いと判断した。比較的近いものは近世本佐倉城出土資料に存在するが、大窯1～2並行期のカワラケが共伴することから、遺構の時期も含めて中世に遡る可能性が高い。

4号土坑 2.0×1.4m、深さ0.2mの楕円形を呈す粘土入り土坑である。黒褐色有機質砂の覆土中に、粘土が混じる部分が点在している。出土遺物はない。

5号土坑 長さ2.1m、深さ0.4mの隅丸長方形を呈す粘土入り土坑である。断面図のように、底面よりやや上に、最大で20cmくらいの厚さで灰白色粘土層が存在した。粘土入り土坑としたなかで、粘土が層状を呈していたのは当遺構のみである。土坑の壁近くに有機質の黒褐色砂が三角堆積した後、粘土がレンズ状に入っている。出土遺物はない。

東 塚 遺 跡



基準土層 客土・山砂。I：耕作土。a近年の耕作土。b古い耕作土。I b'色調違うがI bと同一層か。II：黒褐色砂，有機質で砂・土混じり，縄文土器等遺物混じる。III：茶褐色砂，砂帯の地山で鉄分を含む。

5号 1 暗褐色土。2 暗褐色砂。3 暗褐色砂，粘土ブロック・焼土粒多。4a 黒褐色砂，有機質砂。4b 黒褐色砂，炭化物混じる。5 白灰色粘土しまる。

6号 1 暗褐色砂。2 黒褐色砂 有機質砂に炭化物混じる。3 暗褐色砂 地山の青灰色砂混じる。

第20図 東塚遺跡遺構・遺物図

東 塚 遺 跡

6号土坑 長さ2.0m、深さ0.3mの隅丸長方形の土坑である。断面図のように、有機質の黒褐色砂が底面から厚く堆積しており、粘土粒は含まれない。出土遺物はない。

7号ピット 径0.8m、深さ0.3mの小穴であり、素焼きの管状土錘片1点が出土した。

9号溝 幅0.5mの溝であり、調査区内で7mを検出した。出土遺物はないが、重複関係により、3号土坑より古い。2次調査で検出した東西方向の溝につながる可能性があり、南北方向の中世遺構群を区画する溝・道路状遺構に直交する。

12号・13号土坑 確認調査のみで終了したが、いずれも検出面で粘土を確認しており、2～4・5号土坑と同様の粘土入り土坑と考えられる。12号は2.3×2.0m、13号は1.4×1.0mの規模と推定される。

粘土入り土坑の時期・性格 2次調査と本次調査で検出された粘土の入った土坑は、15世紀ころの台地上遺跡に多く見られる「粘土貼土坑」に似ている。しかし、形状が明確な長方形でなくやや不整である点や、粘土の入り方が少なく、一様でない点などから、同じ遺構とするのは憚られたため、「粘土入り土坑」と仮称することにした。出土遺物は少なく、時期も不明確である。近世まで下る可能性を含めて、今後の研究に委ねる必要がある。ただし、2次002号土坑では瀬戸・美濃系陶器大窯1～2並行期のカワラケ(小皿)の大破片2点を伴っており、本次2号・3号土坑からも、小片であるが同時期のカワラケが出土している。この点を重く見て、土坑群の時期は、カワラケの示す中世・16世紀ころの可能性を指摘しておき、2次調査の整理・報告において再度検討を行いたい。



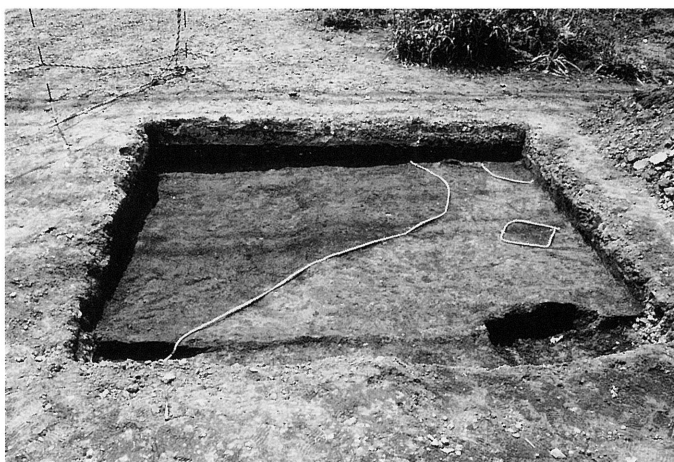
調査前風景



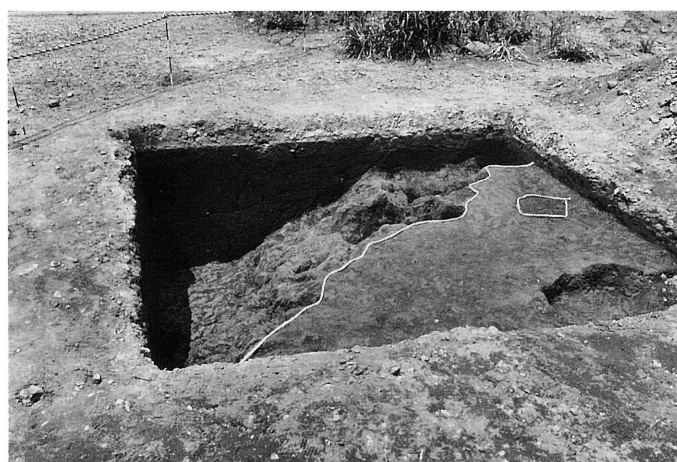
トレンチ内表土除去作業



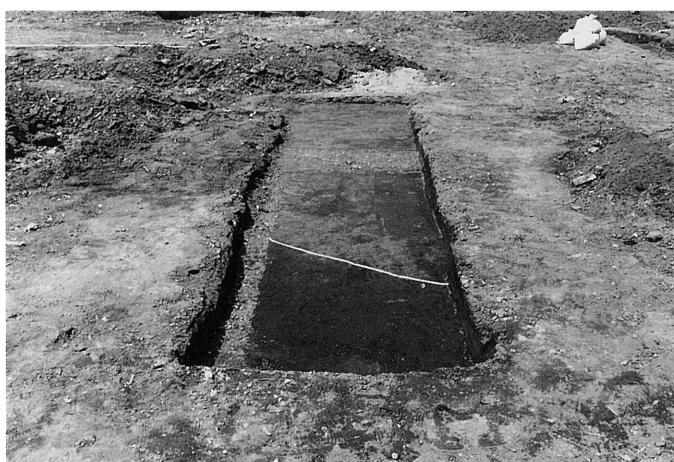
遺構確認作業



1号墳（2トレンチ）確認状況



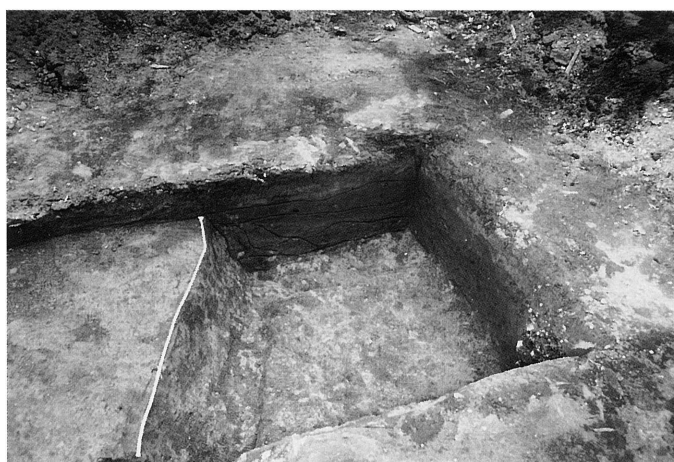
1号墳（2トレンチ）完掘状況



1号竪穴住居跡（3トレンチ）確認状況



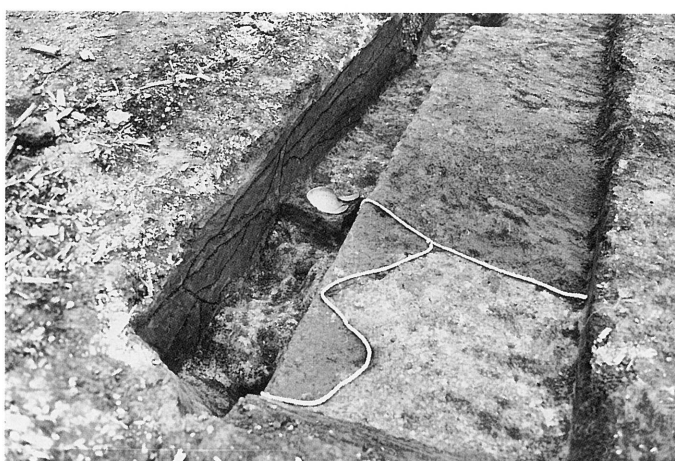
1号竪穴住居跡（5トレンチ）鉄鍬出土状況



1号竪穴住居跡（5トレンチ）完掘状況



1号竪穴住居跡（6トレンチ）確認状況



1号竪穴住居跡（6トレンチ）遺物出土状況



調査区西側全景（南から）



調査区東側全景（南から）



2号・3号竪穴住居跡検出状況（南から）



2号竪穴住居跡（9トレンチ）遺物出土状況 1



2号竪穴住居跡（9トレンチ）遺物出土状況 2



3号竪穴住居跡（10トレンチ）確認状況



3号竪穴住居跡（10トレンチ）土層断面



3号竪穴住居跡（西から）



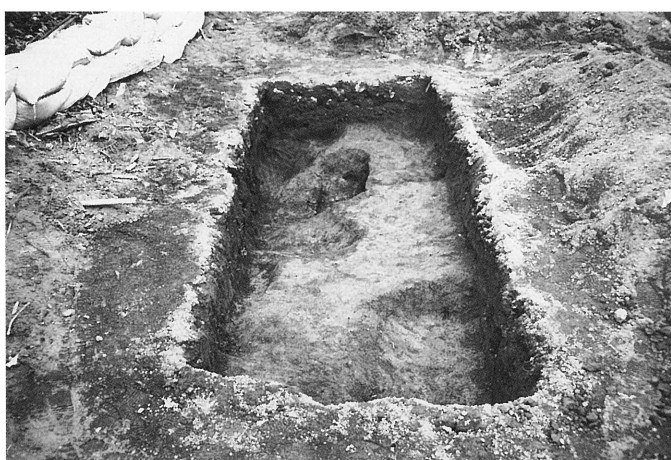
遺構実測作業



中・近世ピット（1トレンチ）確認状況



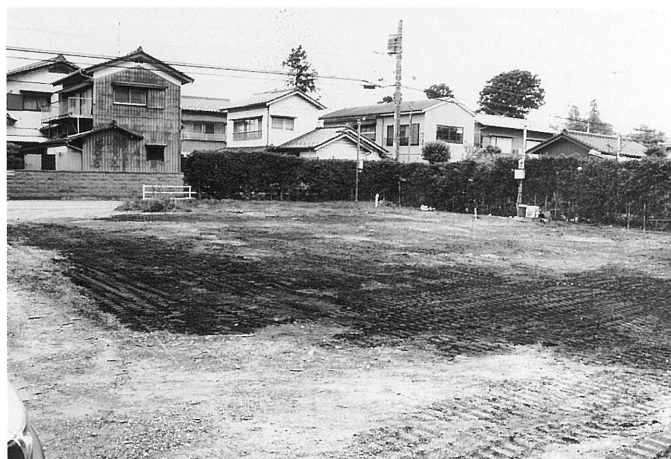
4トレンチ（南から）



7トレンチ（西から）



埋め戻し作業



調査終了風景



調査前風景



3 トレンチ全景



4 トレンチ全景



2 トレンチ全景



1 トレンチ全景



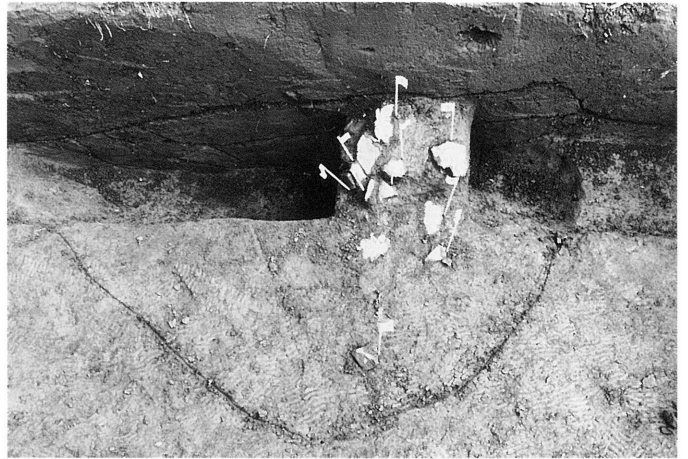
2 トレンチ内005遺構（竪穴）・008号遺構（溝）



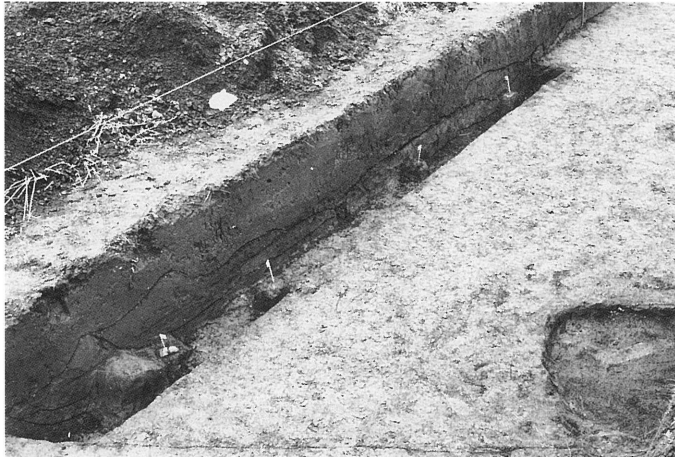
1 トレンチ内004号遺構（竪穴）



調査区風景



1号土坑



2号住居跡



5号炉穴



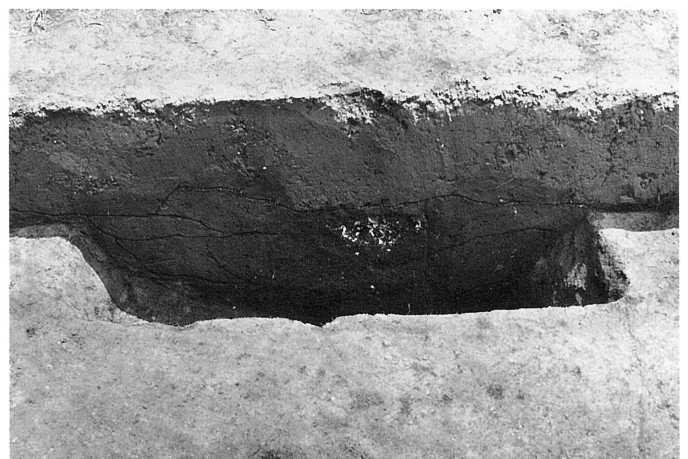
5号炉穴石皿出土状況



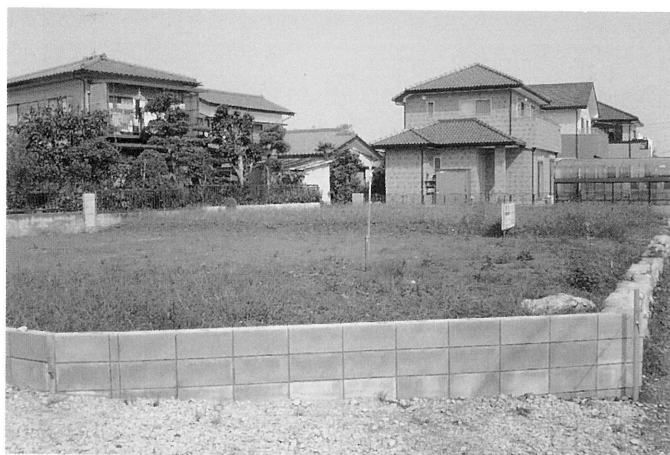
4号住居跡



5号炉穴



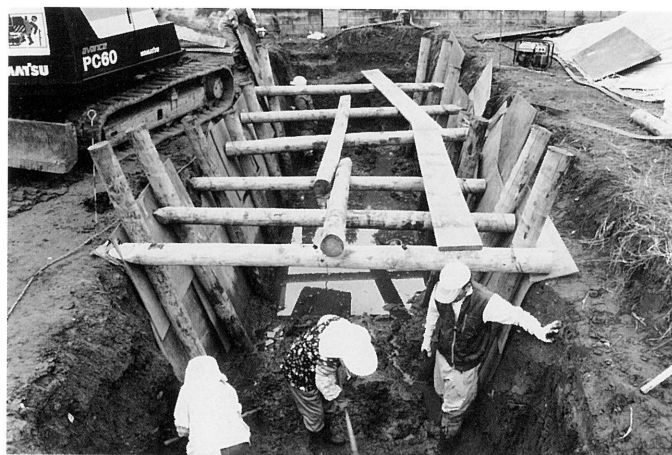
5号炉穴貝層断面



調査前風景



トレンチ掘削状況



トレンチ内作業状況



古墳周溝覆土検出状況



周溝基底面埴輪片出土状況 1



周溝基底面埴輪片出土状況 2



トレンチ土層断面（南東隅）



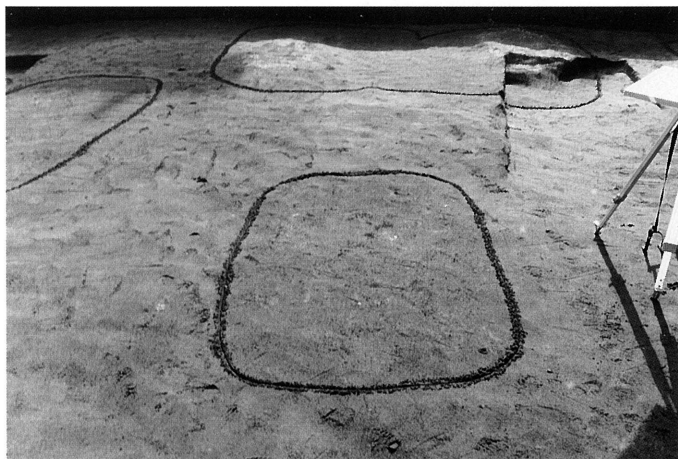
調査後状況



調査前風景



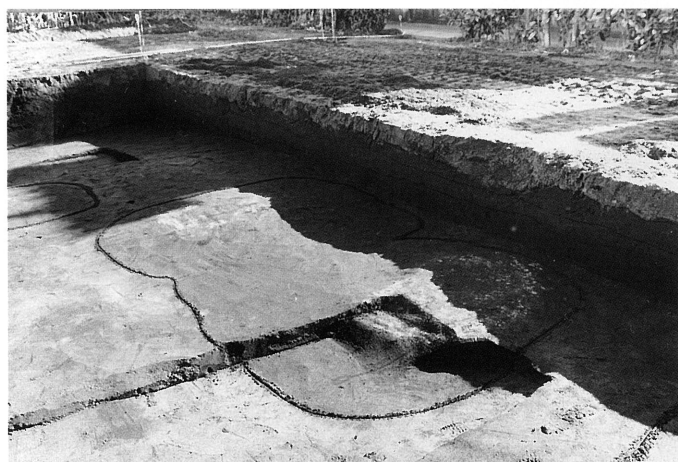
確認調査状況（3トレンチ）



本調査遺構検出



本調査状況



2号・3号土坑



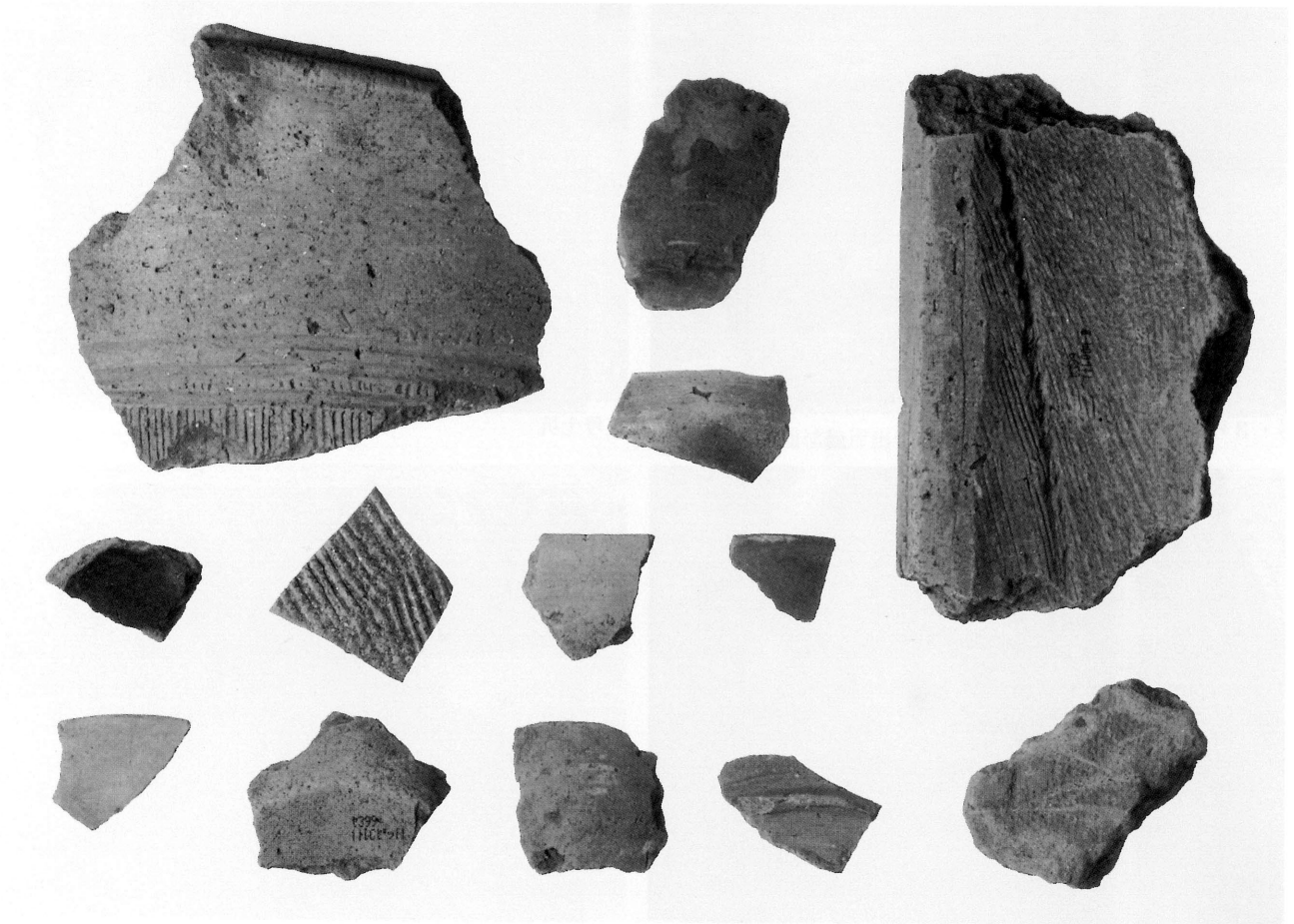
4号土坑

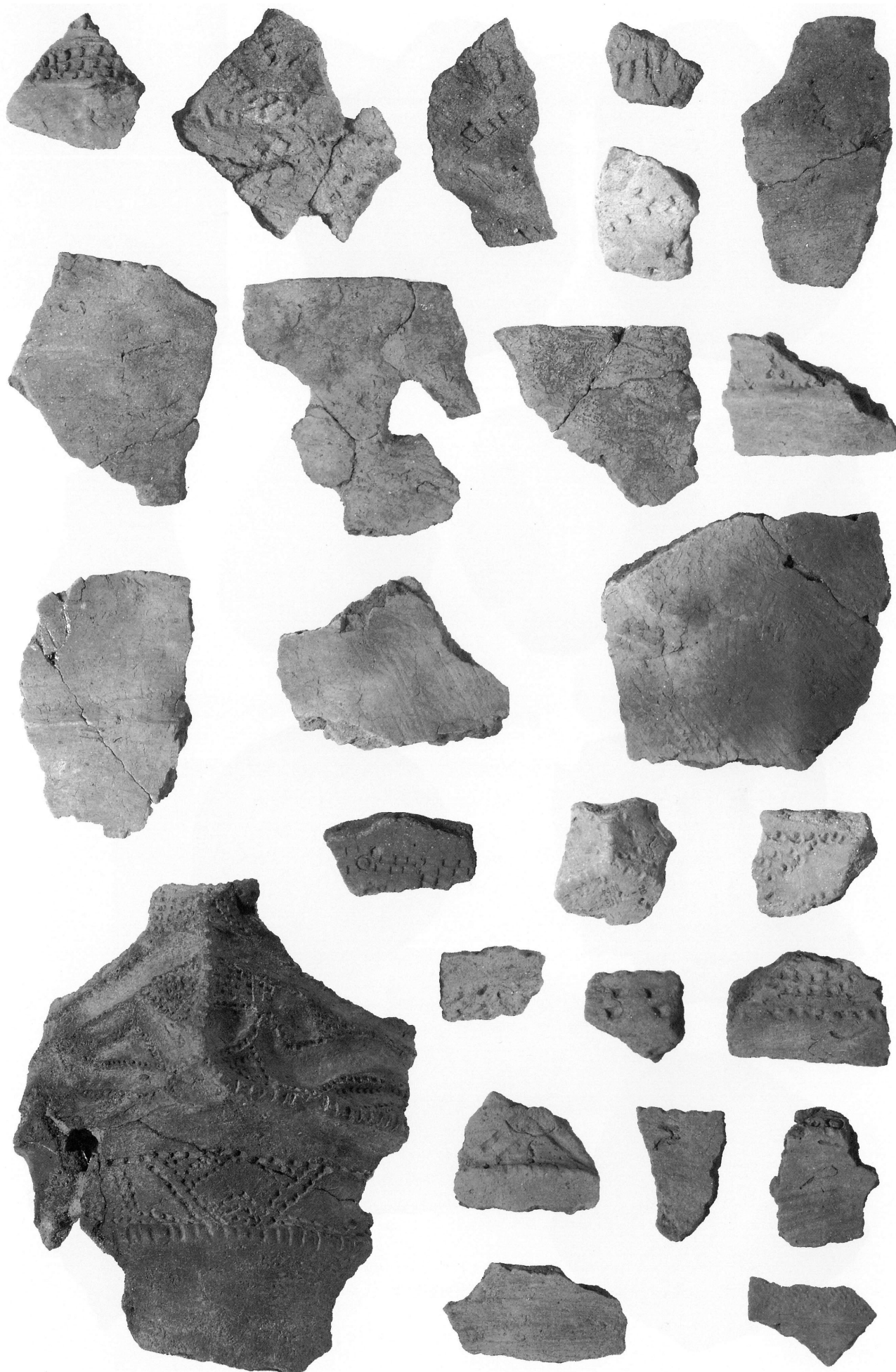


5号炉穴

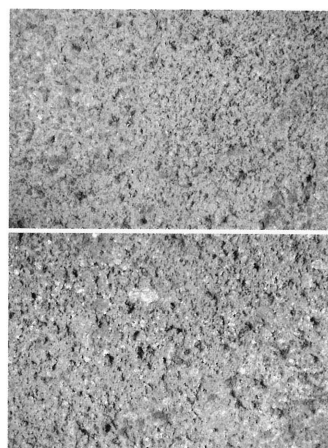
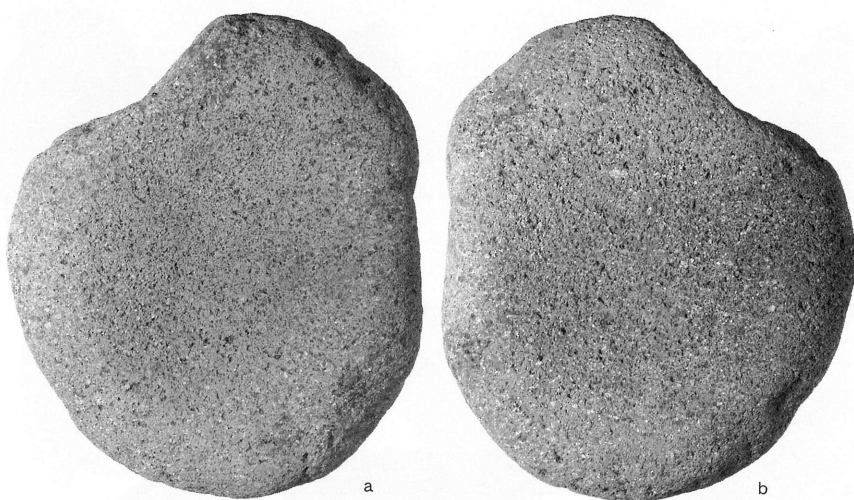


6号土坑

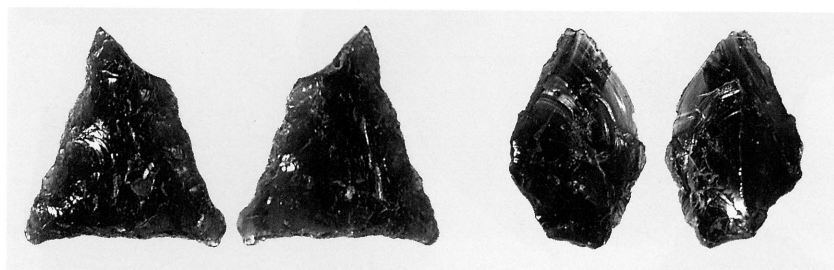


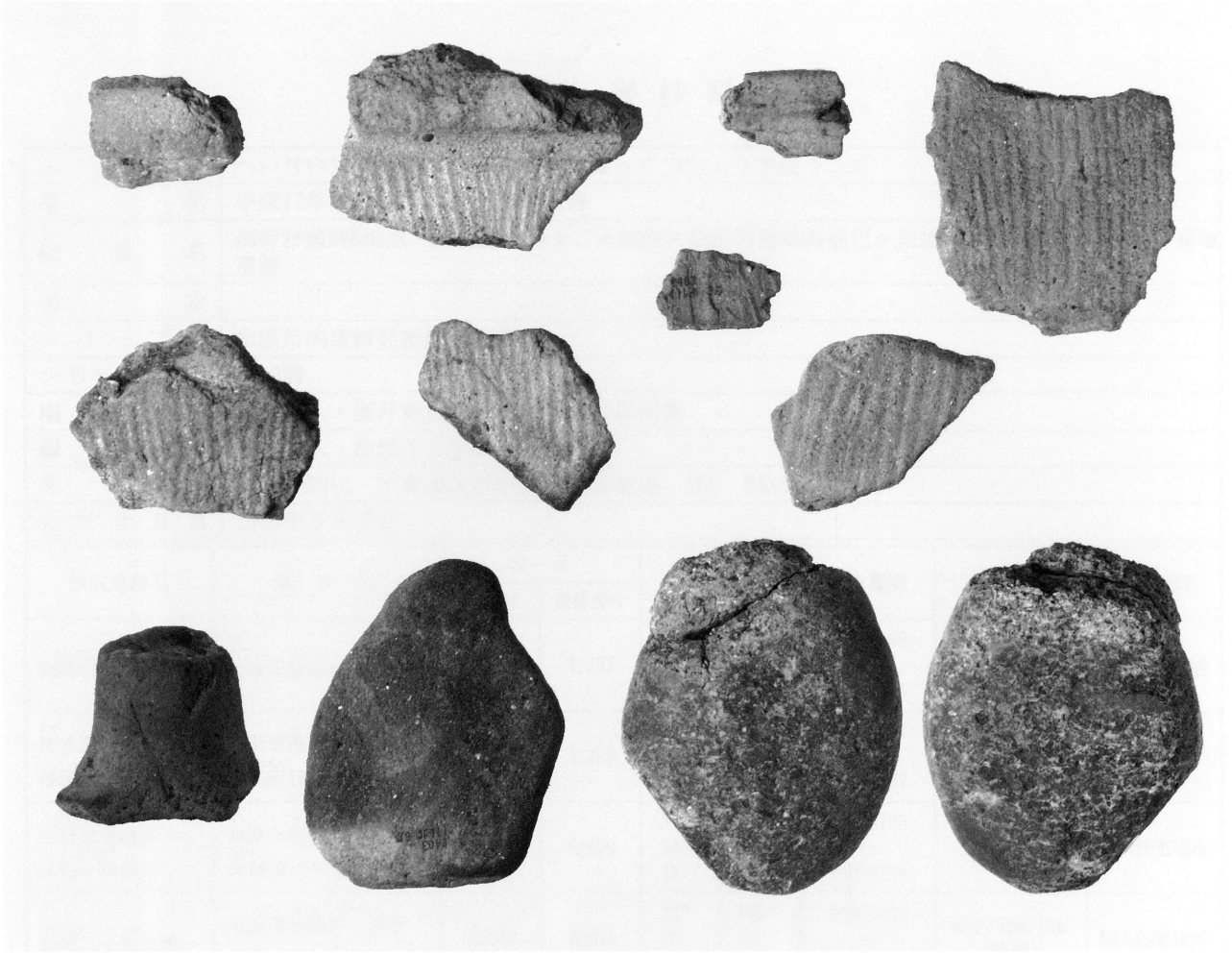


辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区出土遺物 1



石皿部分拡大
(上段：a面、下段：b面)





姉崎二子塚古墳出土遺物



棗塚遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせい17ねんどいちにはらしないはくつちようさほうこく							
書名	平成17年度市原市内発掘調査報告							
副書名	稲荷台遺跡K地点・海土遺跡群十二天地区・辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区・姉崎二子塚古墳・棗塚遺跡							
巻次								
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第19冊							
編著者名	西野雅人・櫻井敦史・小橋健司・忍澤成視							
編集機関	財団法人 市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 9000							
発行年月日	2006年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
稲荷台遺跡K地点	市原市藤井3-88	12219	セ397	35°30'33"	140°07'27"	20050509 ～ 20050513	49m ² /499.6m ² (確認)	個人住宅建設
海土遺跡群十二天地区	市原市海土有木字十二天1609-1	12219	セ399	35°28'42"	140°07'32"	20050601 ～ 20050607	31.5m ² /315.51m ² (確認)	個人住宅建設
辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区	市原市菊間2915-12, 大蔵1810-100	12219	セ400	35°31'46"	140°08'44"	20050704 ～ 20050708	79.6m ² /796m ² (確認)	個人住宅建設
姉崎二子塚古墳	市原市姉崎字二子塚1769-1	12219	セ403	35°28'50"	140°03'07"	20051024 ～ 20051031	50m ² /500.12m ² (確認)	個人住宅建設
棗塚遺跡	市原市姉崎字棗塚1882-3	12219	セ404	35°28'39"	140°03'02"	20051205 ～ 20051216	20.1m ² /201.14m ² (確認), 82m ² (本調査)	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
稲荷台遺跡K地点	集落・古墳	古墳時代後期 奈良・平安時代		竪穴住居跡2, 円墳1 竪穴住居跡2		土師器・須恵器, 支脚, 鉄鏃		
海土遺跡群十二天地区	集落	古墳時代後期～終末期, 奈良・平安時代		竪穴住居跡3		土師器・須恵器, 瓦		
辰巳台遺跡群辰巳ヶ原地区	集落	縄文時代早期 弥生時代末～古墳前期		炉穴2, 土坑1, 遺構内 貝層 竪穴住居跡4		縄文土器, 石鏃, 石皿, 貝類。弥生土器・土師器		広域の炉穴群の一部で貝層を形成。弥生末～古墳前期の集落。
姉崎二子塚古墳	古墳	古墳時代中期		前方後円墳周溝		埴輪, 土師器, 磨石類		
棗塚遺跡	集落	中世		土坑8, 溝1		中世土器		2次調査で検出した粘土入り土坑群の一部を検出

*北緯東経は世界測地系による

平成17年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成17年3月20日発行

編集 財団法人市原市文化財センター
市原市能満1489

発行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1